
二人の伽藍 二つの魔眼

komui

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

二人の伽藍 二つの魔眼

【Nコード】

N3496S

【作者名】

komui

【あらすじ】

雪の降る田舎町で、蒼崎橙子に拾われるライナ・リュート。
なんやかんやで橙子に育てられ、高校生になる。

そして、両儀と出会うそんな物語。

時間の経過的にいえ

ば……………深く考えるな

伝説の勇者の伝説

x空の境界

雪の降る中で（前書き）

つまり黒桐頑張れ！！

目標週一更新

雪の降る中で

まるで、肌を突き破りそうなほど冷たい雪が降る夜だった。

雪が降りすぎて、世界はまるで、すべて白で埋め尽くされるような錯覚を覚える。

ドンドンと地面は白に埋め尽くされ、明日には雪で車は動かせないかな？　なんて思わされる。

そんな中で、一人の女性は歩いていった。

「こんなド田舎にまで来て、仕事キャンセルね……キャンセル料は貰ったが。」

展示できなかったのは無駄に嫌な気分になるな」

と、赤い髪をした腰より下まである長い髪をした美人がそう愚痴る。

「それに何が蒼崎橙子様の作品を置きたいだ。散々出展料渋っておいで」

そうして、懐からメガネを出し、掛けながらそう言う。

彼女蒼崎橙子は、溜息をついて駐車場に止めてある赤いポルシェに乗り込み、明日には雪で積もりそうな道路を見て、今日のうちに出不ければと溜息をつく。

「それじゃ今日のうちに街に戻るとしようかしら」

と、エンジンをふかし、サイドブレーキをはずして、そのままアクセルを踏もうとした時、

それは起きた。

「ん？ なんだ……あれは？」

それは、目を疑いたくなる光景。

それは、疑いを持ってみてしまう光景。

「なんだ、あの光りは……魔術か？
って、人が落ちてきた
だど？」

まるい、人間大の大きな光の玉が、フヨフヨと、ポルシェの目の前に現れ。

そして、その中から少年が落ちてきて、その場に倒れた。

「なんだあの黒の外套は……無駄に坑魔力は高そうだが……ボロボロだな……」

と、橙子は呟き、ポルシェから降りる。興味本位というやつだ。

橙子は、ザツザツと、雪の上を、踏みしめ、少年に近づき、顔を見る。

その少年は、みたところ歳は7、8歳ぐらいで、さんばらに刈られた黒の髪をし、顔はそこまで良くも悪くもないただの少年だった。

「ふーん……ただの少年なら、あの光りの正体はなんだっただんだ？

ん？
強い魔術的な残り香があるな、この少年から……
というより、少年のすぐ近くであり得ない量の魔力が爆発したような感じだな……まるで宝具だ」

と、橙子は鑑定する。

そして橙子は、脈を測り、息遣いはしているが、少年が死にかけているのかをどうかを検知する。

そして腕から手を離し、

「まあ、死にかけてはいないようだ。だが、こんなところに置いておくといずれ凍えて死ぬ、興味はないが、見つけてしまったものはあれだ……一応あいつに引き渡しとくか」

と、知り合いの刑事に引き渡さそうか、なんて橙子は思い。

そして最後に検査として閉じられた目の、瞳孔のを調べるためにゆっくり手で開くと。

そこには、あり得ない異常があった。

「つつつつ!!! なんだこれは……五芒星だと!？」

こんな魔眼、聞いたことないぞ!？」

それは、本当に目を凝らさなければ見えないほど薄らとした五芒星。

しかし、その瞳からは、あり得ないほどの違和感と、あり得ないほどの威圧感があった。

これは 確実に魔眼だった。

しかし橙子は、恐れるどころか、呆れたように溜息をつく。

「……はあ、まったく厄介なものを見つけた。まさか超能力者だとは……」

……しかし、これは面白そうだな、これはうちで引き取った方が良いかもしれん」

と橙子は面白そうに笑みを浮かべて呟き、少年を車に乗せ、自分

の店。

『伽藍の堂』に帰って行った。

雪の降る中で（後書き）

ライナが来れた理由。

伝勇伝知ってる方は皆分かっただの通り遺物、フラグメてきな感じですね。

目で見える自分への不幸と幸せ（前書き）

世界が爆発すれば美少年とかイケメソが皆死んで幸せになると思うんだ。

目で見える自分への不幸と幸せ

ライナ・リユートは、アルファステイグマ複写眼と言う魔眼を持ったまだ七歳の少年だ。

親はいない、何故なら覚えていないからだ。

ライナが目覚めた時、どことも知れない死体が溢れた荒野で目覚めたのがそれがライナが初めて知覚した映像、それが最初の記憶。彼は六歳の時、ジェルメと呼ばれる女の軍人から訓練と言う名の地獄（愛の鞭）を持って身体能力、魔法展開技術、魔法の数量上昇そして一日五分の睡眠という愛を持って叩きあげられた。

そして彼、ライナ・リユートは、天才と言うのもあったのか、魔法使いとしての技量、そして軍人としての技量、体捌きは、六歳とは思えぬ、あまりにずば抜けた身体能力と魔法技術を持っている。

それは、軍に属しておれば、かなりの人望と嫉妬に苛まれることにもなるだろうが、それでも彼の場合はあり得ない。

何故なら彼は、必ず皆にこう呼ばれる。

化物

と、

何故なら彼は、複写眼を持っているからだ。

彼の魔眼は、あらゆる魔術を解析し、複写する、それはたしかに大いに脅威だ。

だが、それが別に化物と呼ばれる所以ではない。

脅威と呼ばれる所以、それは、

彼の魔眼は、感情によって暴走するのだ。

そして暴走したあとの結末は最悪だ。

何もかも見境なく破壊し、殺す。

それが、彼が、複写眼をもつものが『化物』と呼ばれる所以だ。

そう彼は、ライナ・リユートは『伽藍の堂』という事務所で語ら
されていた。

蒼崎橙子によって。

「ふむ、これは並行世界から来た可能性が高いな……シユバイン
バグの宝具でもなんらかの理由で向こうにあったのか……？ ……
……あああとライナ、その複写眼が暴走するのは、一体どういうこ
とが起きれば暴走するんだ？」

メガネをはずした蒼崎橙子は暫く考えた後灰になった煙草を灰皿
にねじ込んだ後、笑顔でそう質問した。

ちなみに蒼崎橙子は、眼鏡のオン・オフをスイッチとして人格が
入れ替わる。

混同されやすいが、「着用時が穏やか」で、「外した時が冷酷」。
穏やかな面は対人関係を円滑にするために意図的（半ば無意識）
に作っているものであり、時に眼鏡の着用時でも素の面が表出する
ことがある。

多重人格者というよりは「TPOに応じてペルソナ（外的側面）
を替えている」と言った方が近い。

とまあ、説明を入れたが、今はその「冷酷」な状態のため、恐ろ
しいことこの上ない。

それにライナは、若干冷や汗を流しながらも、いつも通り眠そう
な様子で、言う。

「うう……喋るからさ……せめてこれはどかしてくれないかな？　なんか食われそうで怖いんだけど……うう……」

と、ライナは、右には影が形をなしたような猫に、左には『異形』としか言いようのないまさしく化物があり、ついでにライナは手足を手錠で身動きをとれなくされていた。

「なあに喋れば解放してやるさ、それにお前は今日からここに住むんだ。家主に隠しごとはするなよ」

「はあ！？　聞いてないぞそれ！？　それにこんな脅すようなことしなくてもいいだろうが！！　　ってあう……ごめんなさい、口が過ぎました。だから、そいつらを近づけないで……」

ライナは異形の化物を近づけられてなき事を漏らしながらちゃんと喋ると降伏する。

それに、橙子は満足したように頷き。

「ああ、ちゃんと嘘偽りなく話せよ、何せ私たちは親子の様なものになるんだ。隠しだては無用だ」

「……………は？　親、子？」

ライナはポカーンと口を開けてしまった。

今、この女は何と言った？

すると、橙子は言う。

「ああ、何せ私は行き場のないお前を引き取って保護者になるんだ。ある意味私は母親だな、お母さんと呼んでも良いぞ？」

「え、いや……」

ライナは戸惑ってしまふ。

目が覚めたら、いきなり拘束されていて、軍仕込みの拘束抜けを使おうとすると、何故か使い魔と呼ばれる異形の存在に、しばかれた。

そして、この蒼崎橙子と言う女性が、自分の素姓を話せと言ってきて、嘘を言つと、何故だか知らないがすぐにばれて殴られるの繰り返しだった。ジェルメを思い出した。

そいつがいきなり自分はお前の保護者だと言い、母親だと言ってくる。

正直系が見えないし、それに……。

いきなりで強引だが、自分が化物と言う素姓を知つての上で親になるなどと言ってくる。

「あ、あの……」

「どうした？ なにか不満でもあるのか？ 学校にもちゃんと行かせるし食事も寝どこも用意する。それ以上に何か要求でもあるのか？」

「い、いや、だから……」

「はつきりしない奴だな君は。何か言いたいことがあれ言えばいい」

そう言つて、橙子は机の引き出しからもう一つ煙草を取り出し、口にくわえて火をつけ不味そうに味わう。

そして橙子は一つ息を吐いて、ライナに顔を向け、ライナの言葉

を待つ。

すると、ライナは何か、訴えかけるように言う。

「俺は化物だし、なんで……なんでそれを知った上で俺を受け入れるんだよ？」

そうライナは言う。

答えを恐れるように、他人を恐れるように言う。

しかし、橙子は「くくく」と笑う。

「なに、簡単なことだ。君は、ライナ・リユートは面白い。その魔眼も、その能力も、そして君の魔術も体術も、すべて私の助手向きだ。手足にするならお前のようなものが面白い、それだけだ」

と、にべもなく、そう言う。

それにライナは押し黙る。

面白い、なんて言われたのは初めてだった。

それが、歪んでいようと、受け入れてくれたのは事実で。

自分も、ぶん殴られたり散々な目にはあっているが、嘘を言わないこの女性には、それほど親になることに違和感も抵抗もない。

むしろ好意的ですらあった。

それに、行く場所もなかった。

自分に何が起きたのかは分からないが、どうやら、ここは異世界らしい。

天井にある電気や、外の建物、そして服装からして、ローランドとは確実に文明レベルが違う。

だからか、つい言ってしまう。

こんな自分を、

「受け入れて、くれる……のか？　こんな化物を……」

「ああ受け入れてやろう。ああ、あとな、自分のことをそんなに化物と言うな」

と、橙子は、メガネをかけ、優しい目で言う。

「化物と言うのはな、理性を持って人を殺すものことだ。君は、違うだろうか？」

そして、橙子は「それに」と付け足す。

「言葉と言うものは君が思っているより強力だ。その言葉を言い続けることで、本当の化物にだってなることがある

そうはなりたくはないだろうか？」

今橙子が言った数々は、遠まわしにだがライナを、「君は化物なんかじゃない」と、『化物』であることを全面否定することばだった。

それに、ライナは、勝手に涙が出る。

自分が、ただの言葉に救われたんだと、理解する。

いや、この女性からすれば、言葉と言うものは強力らしいが、でも救われた。

「おいおい、男なら泣くなよ、ライナ………と、これは古い言葉だろうか？」

なんて泣いているライナに、おどけてみせる橙子は、まるで、親になんか見えなかったが。

だけど、ライナは言う。

目で見える自分への不幸と幸せ（後書き）

無理やりな展開。ごめんなさい

教えて教育ママ！！ ～魔術解説～ （前書き）

空の境界を知ってる君へ、橙子は若干壊れて見えます。つてか今回は別に見なくてもそんな問題ない話ですね。

前回言い忘れておりましたが、橙子はメガネを着けた時とはずした時とは性格が違います。一応前回のも加筆修正します

眼鏡のオン・オフをスイッチとして人格が入れ替わる。混同されやすいが、「着用時が穏やか」で、「外した時が冷酷」。穏やかな面は対人関係を円滑にするために意図的（半ば無意識）に作っているものであり、時に眼鏡の着用時でも素の面が表出することがある。多重人格者というよりは「TPOに応じてペルソナ（外的側面）を替えている」と言った方が近い。

「とまあ、冗談はほどほどにしておこう」

「俺って、冗談で殴られたのかよ!？」

「よし、それでは話そう」

「ああ、無視するんだ……………」

そうして、ライナは理不尽な暴力にウンザリしながらも、しぶしぶと、でもしつかりと話を聞くのであった。

橙子の話は、魔術の話だった。

「ライナ、お前に見せて貰った魔術、「稲光」だったか？ あれな、魔法じゃなくて魔術だ」

「んあ？ 魔術？ ……別にそんな大した違いも無さそうだけど」

「いいや大いに違うさ、お前の「稲光」は、人間の科学　　つまりライナの世界的に言う道具だな、それで十分再現可能だ」

その橙子の言葉に、ライナは目を白黒させる。

「はあ!？ あんなもんが道具なんかで再現できんのかよ!？」

「ああ、その道具で再現できるのが、魔術。再現できないのが魔法と言うわけだ」

と、まあ簡単に言うのだが、と橙子は付け足す。
そしてライナはそれに質問する。

「それじゃあ、俺のは全部が大体魔術ってことになるのか？」

「まあそうだろうな、まだお前の魔術を全部は見えていないから断定できないがおそらくそうだろう」

そして橙子は「しかし」と、付け足す。

「しかしまあ、お前の魔術も相当規格外だがな、魔術の展開速度も異常そのものだが、

なんせお前の魔術は魔術回路を通さないでそのまま自然のmanaを使っているんだ。

お前がお前の世界の魔法を使うだけなら、その魔力はもはや無限だよ。

それに、見た所お前の血筋も相当良いみたいだし、
魔術回路の数も有り余って申し分ない、本当に、魔術師としては恵まれた天才だよライナ」

と、橙子は呆れたように言う。

そして橙子はそのまま呆れたようにもう一つ言う。

「それに、お前にはその魔術を解析して、複写する『魔眼』がある。しかも解析で起こるはずの異常な脳内処理で起こるオーバーヒートもない、それがこそが異常だ、が。

まあもし、お前が本格的に魔術を学んだら、もしかしたら『根源』に至れるかもしれないな」

と、すらすらと橙子は言う。

ライナは、畏怖として呼ばれる『魔眼』と言う言葉に抵抗があるのか、若干顔をしかめたが、それでも、それは畏怖として呼んでいるのではなく、呆れを混じらせた羨望と褒め言葉だと気付き、ライナは心を軽くさせる。

そして、ライナは橙子のある言葉に引つ掛かりを覚えた。

「根源？」

至極当然の質問。

何故か、橙子の言う言葉の中に、『根源』と言う言葉だけが異常に聞こえてきたから、ライナは『根源』についてつい質問した。

「ああ、魔術師の癖に『根源』も知らないんだっとな……、いや、お前らの世界の奴らは魔術師と言うより、魔術使いが大半か、まあそれはどうでもいいか。

まあつまりだ、『根源』と言うのはだ。

まあ言うとなると、根源の渦と言うものがあると仮定する。

根源の渦は世界の外側にあるとされる領域で、「あらゆる事象の発端」「万物の始まりにして終焉」

この世の全てを記録し、この世の全てを作れるという神の座。と言う意味だ。

まあこの説明だけじゃ意味が分からないだろうが

「

「ああ、つまりこの世界、並行世界を含んだモノや、物の価値、人、音、などの概念の生まれる所にして終わり、って感じか？ それが渦として人の人生、物の動き、がそれらによって渦によってまわされている。いや言葉にするなら、『（から）とか言った方がいいのかもしれないけど正しくは無いんだろっな、まあとどのつまりアカシックレコードみたいなもんか」

そのライナの答えに、「へえ」と橙子は言葉を漏らす。

「アカシックレコードなんてルドルフ・シュタイナーの提唱した言葉が文化の違いすぎる向こうにあつたのも驚きだが、ライナの呑み込みの速さも褒めてやりたくらいだな。自分で天才なんて言っていたのもあながち嘘じゃないな」

と、橙子は驚いたように言う。

そして橙子は思う

（これは魔術なんて教えたら本気で根源に到達しそうだな……）

と、呆れをこめた溜息を一つする。

そしてライナは、その褒めてくれた橙子に、若干照れながらも年相応の7歳の笑みで返す。

それに、橙子は、煙草を吸いながら笑みを返すのであった。

橙子はライナに仕事を押し付け、考え事をする。

（魔眼の件もあるけど、少しライナの体を調べただけで、中に何がいるのは分かったんだ、一体何がいるのか……）

もう少し調べてみよう」と、橙子は考え、ライナを一瞬見た。

（『化物』か、私も相当な『化物』だと思うが、ライナの中に居るのは一体どれほどの化物なのか……）

と、橙子は考え、考えているだけじゃ答えに辿りつけないな、と悟る。

世界の違いはあまりにも分析するための壁を大きくした。

こうして今回の物語は終わる。

教えて教育ママ!! ～魔術解説～
(後書き)

さて、壁はいくつもあるのです。

先見る瞳（前書き）

ギチギチと、ギチギチと、音を立てる。

それは、肉を割く音にも似た、扉を開く音だった。

そこには、クモの様な悪魔がいて、そのクモの様な悪魔は、指を目に当てて自分を操る。

すると、すべてがあらゆるグラフで測れるようになってた。

そして、まるで、世界が一変する。

風船のように、破裂していく子供と大人。

まるで、砂場の砂のようになる人間

ガラス細工のように碎ける男。

まるで、食肉を捌くかのように裂かれる女

そして、最後にはすべてがもろく崩れ去る。

それが、ここ最近見る夢だった。

先見る瞳

ふと、目が覚めた。

そこは、乱雑な事務所のソファで、そこは自分の親がいる家だ。時刻は、深夜3時。

ここ数日は、仕事を教えてもらい、ぶん殴られ、そしてご飯を一緒に食べた。

それは、本当に、本当にとても幸せで、たぶんこれ以上の幸せなんて、もう無いんじゃないかってくらい幸せだった。

「でも、やっぱり、俺は、 っっ」

胸が苦しくなる。

熱くて、まるで熱し過ぎた石炭を肺にねじ込まれたようだ。

自分は、化物だから、だから、いつ暴走するかも分からない瞳で、大事な人を傷つけないで、いつもこんな時間に起きてしまう。

「あっっ……うぁ……」

しかし、今日に限って何故か瞳が疼く、強引に、無理やりに解放させられるかのように、瞳に五芒星が映る。

それが、強引に外をのぞく。

「っっっ！！ なんだよ、これ……」

それは、何処を見ていたのか、今の自分には分からない。

何故なら、それは『 』と言うものだったから、理解ができない。

でも、瞳だけは、外を見ている。

強引に、強制的に、圧倒的に外を見ている。

畏怖で、怖気で、恐怖で、そして

羨望で、外を

見ている。

「あそこに、なにか……あんのか？」

しかし、外には何もなくて、ただの街と遠くに森があるだけ。

でも、分かる、似たようなものが、そこにいる、体ではなく、心のありようがだ。

それが、何故か分かる。

それは、まだ空っぽな自分が埋まっていなくて、どこか、大切なはずの、心の拠り所の橙子を、まだ信じきれていないから空っぽなのであろう。

だから思う。

「あつちの方向か……」

この伽藍洞の心を埋めるために、似たようなものを探すのも良いのかもしれない。

ライナは、そのまま瞳の五芒星が消え、瞳が強引落ち、眠りに落ちた。

それは、瞳が見た、本能による未来への畏怖と気付かずに。

ライナは探すことにする、良く分からないものを探すことにする、それが、『』であり、彼であり、彼である者でも、探すことにする。

瞳の中の意思とは反して、ライナは探すことにする。

それは、人として異常なほどに優しいライナの、『化物』なんてことを受け入れて、傷つかないように生きてきたライナの『願い』

だったのかもしれない。

こうしてライナは、探すことにした。
どこの誰とも知れない者を探すことにした。

先見る瞳（後書き）

次からは普通に話を進めて。

2話先くらいからたぶん、一つだけ種をまきます。

依頼変動（前書き）

カチ、コチ、と、時計の秒針が動く音がする。

カチコチ、カチと、秒針の音がする。

カチコチカ、コ、チ、と、秒針の音がする。

カ、カカチ、チカコ、チカチコチと、秒針の音がする。

カチカコチカ、チコカチカカチチコチココカコ、チカチコカチ、と秒針の音がする。

カチカコチカチ、コカチカカチチコチココカコチカチコカチカチカコチカチコカチカカチチコチココカコチカチコカチカチカチカチ、カチコカチカカチチコチココカコチカチコカチと秒針の音がする。

次第に、秒針の音の感覚は無くなり…。

壁中の時計が鳴りやまないベルを鳴らす。

そうして、『それは』出てきた。

「いや、そうだけどさ。でもちよつとは手伝つてくれても良いんじゃないかな!？」

だつて俺の養育費とか、母さんが払うんじゃないんで俺が稼ぐつてのは正直ないと思うだよね、俺!」

しかし、橙子は短くなつた煙草を灰皿にねじ込みながら、メガネをはずし、荒々しくハツと笑い飛ばす。

「何を言つんだ。今のうちに自分のことは自分でできるつようにさせようとする親の愛情が分からないのか？」

それに、デザイン関係の仕事はそれなりにやっているじゃないか」

「でも気に入らない奴全部俺に回してんじゃねえか!」

「おいおい、当たり前だろ? 私のこの仕事は趣味。つまり道楽でやっていることだ。」

だから仕事など、気にいった縁と、しがらみの仕事で十分だよ」

そして仕事を教えてまだ一カ月しかたっていないのに、その子供の外見でどうやってとつてきたのかと不思議に思うが

仕事を取ってきた上でしかも仕事をバリバリ回せるライナに橙子は、「お前は優秀だからな、それくらいの仕事なら(デザイン)お前に任せられるよ」と、言い、もう一本煙草を取り出し口に咥え、笑う。

シュボと、マッチに火がついた音がし、煙草に火をつける。

マッチの火を手を振って消し、煙草を一つ吸い、はいてからライナを見て言う

「あとな、ライナ。養育費のことなら払える分の最低限の仕事をすればいいじゃないか。」

なんでそうまでして同じ方角に拘って依頼を取ってくる？」

その橙子の言葉に、押し黙る。

しかし、いつかはバレルかと思っていた。

この一カ月、とある方角に絞って依頼を取っていた。

何故なら、笑える話だが、魔眼がその方角を見たから、と言うほかない。

あの時の、一か月ほど前の夜の、魔眼の記憶がよみがえる。

勝手に五芒星が、自分の意思と関係なく現れ、その方角を、食い入るように見ていた。

ただ、それだけの話。

ただそれだけの話で、その方角にできるだけ行くめに、依頼を受けただけ。

もしかしたら、ひょんなことでそれに出会えるかもしれない。

顔など見なくても、同類なら、見ただけで分かるだろうから、顔が分からなくても心配はない。

その事を、ライナが思いだしていると、橙子は何かライナの顔に反応して、しかし、それを無視して続けて言う。

「何にそこまで拘っているのかは知らないが……。ライナ、その思考に、自分を喰われるなよ？」

と、橙子は煙草を口に啣えた状態で事務所の奥に歩きながら意味深に言い、巨大な鞆を取り出す。

「んあ？ どう意味だよ？ ってかどっかいくのか？」

「意味はそのままだ、それにどこかに行くのかと言われれば、知

り合いに会いに行く、と言ったところだ」

「知り合い？」

「ああ、時計塔に居たころの古い知り合いでね。荒耶にアルバ、それに次ぐ、もう一人の腐れ縁だ」

そう言い残し、橙子は巨大な鞆を持って、事務所から出かけた。

ライナはライナで、

「って結局俺一人で全部すんのかよおおおおおおおおおお！！」
叫んでいた。

して2時間たった。

「ああ……これってこの方がいいのか？ あう……橋のデザインなんて分かるはずねえじゃん……もうローランドにあった大橋をデザインに現代風にしてみるか……」

と、現代の知識も、常識も、仕事もそつなく覚えた7歳は、着々と仕事をしていく。

「ってああ！？ もう7時じゃん！ これから学校かよ……ああ……時間が足りない……」

もう真面目に働きたくない……………」

そう思うも、体は勝手に書類仕事をする。

「もういいか、このデザインも終わったし、あとはこの書類を終わらせて…………ってなんだこりゃ？」

書類には3m近くある大きさの時計製作、という依頼と書いてあった、が。

その書類には、とあるものが書かれていた。

「これは…………魔方阵か？」

と、ライナは五芒星を目に展開して書類を見る。

それは、時計全体に、所々、ただの模様に見える絵が書き込まれてあり、しかし、見るものが見れば、魔方阵だと分かる。

「だけどただ魔力を媒介にして動力を魔力で動かすだけの時計だ？　なにに使うんだよこれ」

糸が読めなくて、正直意味が分からない。

ライナは頭をゴリゴリと掻き、眠そうな目で書類を見つめ続ける。書類には依頼主の名前はルドルフ・エイガーと書かれていた。

しかもご丁寧に住所まで書いてある。

「ルドルフってのが魔術師なのか？　ってか俺ってこんな依頼受けたっけ？　どうにも手当たり次第受けすぎたから覚えてないんだよなあ…………」

欠伸をして、時計を見るすでに七時半だ。小学校には八時にはつ

いておかなければならない。

「ここらなら、ライナが走れば二〇分の距離だが。しかし、

「今日は休もうつと……………一度寝てから、まあ害はないし……………時計は作るかな……………ああ面倒くさい……………」

こうして、ライナは、元の世界では（これでも）考えられないほどのやる気を出し、仕事に励むことにした。

学校はサボったが。

こうしてライナは昼に起きて時計を作った。

ただ一つ言えるのは、ライナは気付いていないようだが。

この依頼、ロクなことが起きないだろうと言っ事だ。

そこは、魔術師の工房だ。

広さは長大で、大学の体育館ほどの広さがあった。

壁中に数々の年代物の時計からデジタルの時計までさまざまの時計がある。

そして、その時計に共通して言えるのは、すべて定時に音のなる時計だった。

そこで、なにか、しわがれた男の音がする。

それは、身長が2 m近くある、見た目の年齢は三十〜四十代の男だった。

その男は、その時計の真ん中で、自分の周りを囲むようにある半径5メートルの長大な、宝石と、鉄と、鶏の血を混ぜて書かれた魔方陣の中で、手を組み、祈るように唱える。

それは呪文だった。彼は、魔術師だった。

「硫黄にはアンチモンを水銀には鉛を混合し、

五大元素の祝福と罰のもと、

大錬金法にて合成す、

出でよ、

出でよ、

出でよ、

出でよ紅き血の輝きを持って、

血光を持って生成されたまえ、

賢者の石よ

そう男が言い終わると、暫く、シンと、空気が止まった。その言葉の通り、音の振動が、空気の振動が、一切しなくなった。

そして異変が起きた。

いきなり、時計が、一斉に鳴り響く。

ゴーンと、鳩時計もパツポーとなる、デジタル時計もピピピとなり。

音の洪水が溢れた。

そして皆、時計の針は深夜の0時を指していた。

そして、魔方陣の中でも異変が起きていった。

魔方陣の中で、何かが手のひらサイズの、紅いスライムのようなものが、蠢いている。

それはうねうねと、膨張と収縮を繰り返し不安定。

形は様々なものに変え、水になり、石になり、泥になり、紙になり、と様々だ。

そして、男は暫くそれを見て、右腕を上にあげる。

すると、壁中の時計が反時計回りで回り始めた。

年代物の時計が、現代的な時計が、まるでブレーキが壊れてアクセルを踏み抜いた車のような速さでグルグルと高速で回り始める。

デジタル時計は、常に数字が変わり、何を映しているのかが分からない。

グルグルグルグルと、時計が周り。
そして、魔方陣の中で、男はさらに呪文を唱える。
魔術が、行使される。

「千の時の祝福を、万の時の逆行を、命の重さと、命の軽さを、
逆行するは祝福、歩は世界、
願いを受けし重さはそれを固定する」

唱え終わると、男の頭上に、小さな光の弾ができる。
それには、目を疑うような、圧倒的な魔力がこめられていた。

「さあ、行け……」

その言葉と共に、光の弾は、時計回りに高速で回る。
周りの時計と同じような速さで圧倒的速度で回る。
マワルマワルマワルマワル。

時計は廻る。逆しまに廻る。
光の弾は廻る。未来に向けて廻る。

グルグルグルグルと、光の弾は回る、廻る、周る、マワル。

そして光りは、紅いスライムの上を回り。

落ちた。

光りはスライムにあたり、目も開けないような紅き閃光で爆発す
る。

その紅い光は、圧倒的な光りを放ち、それが20秒ほど続いた。

そして、光りは晴れる。

すると、辺りは白い霧につつまれていた。

それに、魔術師は面白みのなさそうな顔で、「ふん」と息を吐く。魔術師は、魔方陣の真ん中に歩き。

「実験は成功か。賢者の石ごとき、どうでもいいが、な」

そうして男は、魔方陣の中心、スライムだったモノを拾う。

それは、スライムなどではない、紅い立派な宝石だった。

しかし、それは圧倒的な触媒だった。

何故なら賢者の石。

石を金に変え、あらゆる魔術の触媒にもなるという伝説のアーティファクト。

賢者の石の作成難易度は、それを生成できるものは、不老不死に至ることも可能だと言われるほどの生成の難しい石。

男はそれを、

「この程度では、まだ私の夢は叶えられん」

そのまま地面におとし、見向きもせず部屋から出ていく。

部屋に残ったのは、未来を歩み続ける時計と、一つ残った賢者の石だけだった。

其の名は錬金術師 (前書き)

むり、今回の話で終わらせるなんて無理。
なんで次回で終わりとか言っただ俺。
あと遅れてごめん

其の名は錬金術師

カチ、カチ、と、時計の音がする。

そこは、ただそれだけの、時計しかない虚無の部屋だった。

そんな所に、一人、白衣で、角の生えた髑髏の泣き笑いした顔をした仮面つけた小学生みたいな身の丈の金髪の男が、病院にあるような丸椅子に座り壁を見ながら、一人ケタケタ笑っていた。

そこで、橙子は煙草を口にくわえたまま、その仮面の男に話しかける。

「おい、変態魔術師。来たぞ」

その言葉に、髑髏の仮面の男は、初めて気付いたかのように、後ろを振り向き、大げさに驚いたように両腕を振り上げ、喜ぶように声をだす。

「おやおやくアオザキじゃないか……君が僕の所に来るなんて……珍しい事もあるもんだね……あはは、僕の研究成果でも聞きに来たのかい？」

「いや、私はお前にあることを聞きに来ただけだ。それを聞いたら帰る」

「なんだい？ 折角来たのに、せっかちなね………だけどもあいいよ、君にはそんな気分だったとはいえ、命を助けて貰ったんだ。その払い終えていない対価を君に払うと思えば、安いもんだね」

と、泣き笑いの髑髏の仮面の男は、ケタケタ笑いながら言い。そしてそのまま笑いをぴたりと止めて、質問した。

まるで、部屋そのものの空気が止まったかのように、男の気配が薄くなった。

「で？ 君はなにを聞きに来たんだい？」

「ああ、お前、最近新しいのができたんだって？」

「ああ、あれか、とりあえず家にあるよ？」

「そうか、で、『エイガー』お前家に何日帰っていない？」

「……二ヶ月？」

「……なるほどな」

「ってかアオザキ、お前はそんなことを聞きに来たのか？」

そう男が不思議そうに首を傾げて言う。

それはまるで、赤子にも似た仕草だったが、この男がすると妙に合っていた。

すると橙子は二次もなくきっぱり言った。

「根源だ」

その答えに、泣き笑いの髑髏の仮面の男は肩をすくめ、そして、ケタケタ笑ってから、

「あれ？ そんなこと？」と、一言つぶやき言う。

「なんだい？ 君はまだそんなモノ（根源）に興味なんてあったのかい？ くくく、君のことだ、もうやめたと思っていたよ」

と、仮面の男は、魔術師の命題を、「そんなもの」扱いし、ケタと笑い始める。

そして魔術師は、言う。

「根源の話なぞ、魔法使いではない私が知っていることなど、こちらの魔術師と大差ないと思うが？」

アオザキの家は魔法使いを排出する家だ。君の方が僕よりは詳しいんじゃないか？」

それに橙子は、少し溜息し、そして呆れたように言う。

「魔術師の命題をそんなもの扱いするなんて『魔術使い』かお前くらいだよ、『ルドルフ・エイガー』それにな、私はただ根源の話をしに来たんじゃない、ただの考察を、私の研究成果をお前に相談に来たんだけだ」

そう橙子が言うと、『ルドルフ・エイガー』は「は？」と口から疑問を漏らし。

そして、慌てたように、立ち上がるうとして丸椅子ごとこけた。

それをみてアオザキは言葉を漏らす。

「お前は相変わらずだな、エイガー……。不測の事態があるとき慌てて台無しにする。お前が私に、行き詰った人形作りのヒントを与えた人間だとはとても思えんよ……」

と、呆れたように煙草を思い切り吸い。

短くなつた煙草を携帯灰皿にねじ込み新しい煙草を取り出す。

そして口に咥え、火をつけた所で、泣き笑いの仮面の男は、慌てて立ち上がり、橙子に言う。

「それは慌てもするさ……魔術師が自分の研究成果を他の魔術師に見せようと言っただ……。」

そんなの驚くなと言われる方が無理さ」

「だが、お前は驚きすぎだな」

と、橙子はくっくつと笑う。

そして、橙子は、真剣な顔で向き直り、仮面の男に言う。

「して、ルドルフ・エイガー。貴様の専門は、普通の魔術師では考えられない、『自動機械人形』の製作だったな？」

そう橙子が言うと、泣き笑いの仮面の男は、「ああ」と頷き、そして語る。

「僕の専門は過去と未来を疾走する魔術だ。機械は未来へ進み、魔術は過去に疾走する。この矛盾を追い求めるのが僕の魔術。そして、その矛盾の先にあるのは、生きた機械だ。機械に、魔術で意思を持たせ、そして動かす。それが僕の近代錬金術だよ。………で？ それはどうしたかい？」

と言うと、橙子が頷く。

そして、橙子は、神妙な面もちで、泣き笑いに言う。

「その人形に、もし、見ただけで魔術を解析し、構成を読み取り、あますことなく魔術を読み取れ、そしてその魔術を自分のモノにできる力があれば、その人形はどうなる？」

そう、言うと、仮面の男は本気で考えるように、腕を組み。

そして、結論を出す。

「もしそんなのがあれば……………脳を強化しようとも、いずれ暴走、あるいは崩壊するね。」

だってそれ、下手したら根源に繋がってんじゃん。魔術をあますことなく見れるって事はその魔術の死をも見ているってことだろ？ そんなの死と魔術の根源について同時並行で読み取っていることになるし、そんなの脳や機械が処理しきれないじゃないじゃん……………それは魔術の根源を見ていることになるんだし　　ってだから根源の話ね……………」

そう男は、納得する。

それに橙子は頷くと。

仮面の男は思いついたように笑いながら言う。

「まあ、そんなのがあるとすれば、まるで根源を記すグリモワール原典だね」

「原典だと？」

「ああ、どんな魔術をも読み取れて、どんな魔術をも記せるなら、もはやそれはそいつ自体が魔本だよ。きつとそれは魔法ですら読み取れるだろうさ。だってどんな魔術も解析できるなら、魔法を読みとれない道理はないだろう？ 魔法は魔術の行きつく果てなんだからさ。固有結界とかは無理そうだけど。でもま、人間には到底できないだろうけど、頭がパンクしてスクラップ廃棄物になっちゃうよ」

と、泣き笑いの男は「あと、たぶん魔眼殺しすら読み取れるだろうな」と肩を沈め言う。

すると橙子は、顎に手を添え、そして考える。

「……………ふむ、なら、そんな人間がいるとすれば？」

「いくなればあり得ない。いるとするなら人間じゃないか、特殊な補助があるか……それか中に化物でも飼って、そいつに演算させてんじゃない？ まあどちらにしても、それは人間じゃないよ。それは化物だ。」

君や荒耶、そして僕みたいだね」

と、男はケラケラ笑いながら言う。

橙子は、また短くなった煙草を携帯灰皿にねじ込みながら、仮面の男を見て言う。

「なるほど、私の見解とそう変わらないと言う事か……。まあ「原典」、という面白い話も聞けたし良しとするか。それじゃあな、エイガー。私は帰るよ」

「そうかい？ またこ　　って研究成果は！？」

「そんなもの、魔術師が早々見せると思つか？」

「いや、そうだけどさ、でも見せるって……」

「命を協会の封印指定の代行者から逃げ延びた対価と思えばいいだろう」

「はあ！？　また僕騙されたの！？」

「お前が騙され安過ぎなんだろう、本当に魔術師か？　お前」

「僕は魔術師で魔術使いなんだよ！！　愚者であって賢者なの！　未来に向かいながら全力で後ろを走ってるの！！」

と、泣き笑いの髑髏仮面のおとは、その仮面の通り、髑髏という死を内包した仮面で生き生きという矛盾と矛盾したことを言う。この男は、矛盾を矛盾として受け入れ、矛盾を一つの数式として扱い魔術に組み込んでいき、結果機械に行きついた魔術師だ。

そして、頭の足りなさが中途半端で騙されても仕方ない。とかいう男だ。

そして、橙子は、笑いながら、その家を離れようとし、

「まあお前のその考えの足りない魔術師としての性格は、好感に値するよ」

と言うと。

仮面の男はとたんに大人しくなる。

というより、全身から「マジで!?!」と言う雰囲気を出している。

「え？ それって僕のことす」

言葉を遮って橙子は言う。

「あとな、私の街にお前の名を語った自動機械人形が現れたぞ？ 暴走してんじゃないのか？ あれ」

「え？」

と橙子は言うと、早々に帰っていった。

魔術師としてはあるまじき男の『恋』は無残にも霧散し、そして一言、意中の人物に最後にこう言われたのだ。

『お前の人形、暴走してるからさっさと片付ける』

と、自分の研究成果が暴走していることで、意中の人物に醜態をさらし。

さらに、自分の作った自動機械人形の強さに、エドガーは酷く頭を悩ました。

そして舞台は移る。

そこは、三咲町であった。

そこで、ライナリユートは、軽トラから時計を下ろしていた。

「あゝ運んでくれてありがとうな、運びやおっちゃん」

「おう、それじゃ坊主、一時間ほどしたら、またこっちによるぜ」
「？」

「まあ、それをお願い」

と、淡々と言葉を交わし、3メートル近くある時計を子供の力とは思えないほど軽々と持ち、そして、とある、大学でに入る。

そして、校門の入口付近にある、警備員室の警備員のおっちゃんに、とある人物を呼んでもらう事にする。

「なあ、おっちゃん。ルドルフ・エイガーって人を呼んできてくれない？ ご注文の品を持ってきたって」

と、ライナがダンボール梱包された時計を見せながら言うと、警備員のおっちゃんはお使いかい？ とライナの頭を撫で、ちよつと待ってる、と、警備員室の中にある電話で職員室に連絡をとる。

すると、後10分ほどで来ると言う事らしい。
そしてライナは思う。

(まあ相手は魔術師だしな、母さんが言うには魔術師は頭が良くて狡猾らしいし、……まあそう言うのは慣れてるけど……まあ面倒くさいけど子供の振りしておくか………)

と、とりあえずライナは子供だけど、一応子供と言う体裁をとるため、子供の思考の振りをして、自分の正体を隠すことにした。

そして待つこと10分。

大柄の、身長が2m近くある、見た目の年齢は三十〜四十代の白髪の白衣を着た男が来た。

それにライナは、社交辞令として頭を下げる。

男は口を開いた。

「君が、依頼のモノを持ってきた伽藍の堂の店主かね？」

と、しゃがれたような声で、そう言う。

それにライナは年相応に、わざとらしく首を振り、

「ううん、俺、母さんにお使い頼まれたから来たんだ」

と、子供らしくライナは言う。

たぶんをそれを橙子が見たら、「気持ち悪い」の一言で斬り伏せるだろうが今はいない。

そしてライナ自身も妙に恥ずかしくなるほど子供の自分には慣れない。

ジェルメトの特訓で子供の心をどこかに置いてきてしまったのだろつと言う事は想像に固くは無かった。おそるべしはジャルメと言う事が、それともそんな環境を生み出したローランドと言うべきか、それは誰にも分からない。

とまあそんなことは置いておいて、ライナは白衣の男、ルドルフ・エイガーに言葉をかける。

「これは、どこに持っていったら？」

そう、ライナが言うと、ルドルフは興味のなさそうな顔で言う。

「ついてこい」

と、身をひるがえし、白衣をはためかせながら、体育館の方に向かう。

そして、ライナは、ルドルフについて、校門に入ると、その瞬間妙な違和感に襲われた。

(つつ　　なんだこりゃ……結果?)

それは、まるで外からでは分からないが中からならはつきりと分かるほどの、外と中を分ける、強い違和感を持った魔術の力が働いていた。

それは、橙子が使っている、精巧な結界とも違う。

しかし、魔法使いが使つ、空間を隔離する結界とも違う。

中とそとでは、まるで世界が違う。

ここは、複写眼を使えば、そこらじゅうに違和感の塊が浮いてい
ることが予想できる

この違和感に嫌な予感がする、まるで、時間を外と中で、微妙に
ずらして、違和感を視認させないようにしているような。

しかし、ライナはこの違和感をまだ探知しようとはしない。

まだ複写眼を使わない。

何故なら、目の前には、魔術師と予想される人物がいるのだ。

そんなやつの前で、そうそうに手札を見せるわけにはいかない。

だから、ライナは、ただ、この男についていく。

きつと、敵対するだろうと思いつながら。

其の名は錬金術師 (後書き)

二人のルドルフ・エイガー

片方もちろん自動人形。

そうそうに上の方でネタばれしたし、ここで話しても問題は無いよね。

この話、自動人形という言葉に意味はあるけど、そなに意味は無い。

ただ、自動人形の願いに意味がある。

とまあ、そんな話。

仮面の男は、橙子に恋している。助けられた時から。

魔術師らしくない矛盾した過去と未来を走る魔術師。ルドルフと、自動人形ルドルフ。

まあ魔術師のルドルフの方は深く掘り下げる必要なんてないしどうでもいいね。

ただ単に、この話、ライナの成長を促す話だし。

大事なものは人形の方です。

時計の闘技場（前書き）

その願いは無垢だった。

その願いは純粹だった。

その願いは奇跡だった。

……だけど、その願いは、周りから見れば悪だった。

時計の闘技場

ライナは、ルドルフについて、体育館に入った。すると、

「うお………すげえ時計の数だな………」

体育館の中には、果てしない数の時計が地面に、壁に、天井にとさまざまな場所に無数にあった。

そしてライナは、思う。

（こりゃ………魔術媒体の塊だな………こんだけあると………上級礼装より達が悪いだろ………）

もうここ事態が異界だな………）

そう、ここは、ある種固有結界のように異界だった。

壁に無数にある時計は、全て魔術、そう、錬金術のための媒体で、そして、時計の持つ魔力、時計の年代、そして、それらに上手く魔力を流せるようにするための、時計の配置がしてあり、もはや魔術のための、魔術師の工房としてはあまりにも上質すぎる空間だった。

ライナの魔法に関する才能は複写眼保持者であることだけではなく、それを抜きにした魔法に対する天才的な理解力と感性による所が大きく、その能力に比べれば複写眼などおまけに過ぎないというのが師であったジェルメの評価だ。

そんな飛び抜けた魔術師としての才能を持つライナは、複写眼を使わずとも、時計の持つ魔力、年代、そしてそれらを取りそろえる時計の配置で、どれだけ危険なものかを見破った。

もしここでライナが複写眼を使えば、魔力で空間がうねっている

の見えるだろう。

そして、ライナは言う。

「……この時計は何処にもっていけば？」

そうタダの子供のように言うと、二mほどの白髪白衣の巨漢の男、
ルドルフ・エイガーは、

「……ああ、その円の真ん中に、舞台に向けて、一二時を向けてくれれば良い」

と、なんの人間味もなく、ルドルフは機械の様な対応で、体育館の中心、人が余裕で入りきるようなどう見ても魔方阵の円を指さす。それに、ライナは気にしないふりをして、時計を言われたとおりに置く。

そして時計を置いた時、ルドルフは突然言う。

「して、魔術師。君はここを見てどう思う？」

「……んあ？ どういう意味だよ？」

ルドルフの突然の言葉に、ライナはそう返す。

いや、いきなり魔術師とばれたせいで、動揺し、そう、返すしか思考が働かなかったと言う方が正しい。

そして、そんなライナの動揺を無視し、ルドルフは言う。

「ふむ、質問の意図が分からなかったか？ なら言おう。この、学校の一般人を生贄にし、とあるものを生み出すこの魔方阵を見て、君はどう思う？」

そうルドルフは言う。

そうルドルフは顔を変えず言う。

それにライナは、少しだけ間をおいて、眠そうな顔で言う。

「……………なんで魔術師ってのがばれたかは分かんねえんだけどさ、まあ質問に答えるなら、そりゃ、頭がおかしいんじゃないかねえの？
っっておもっけど？」

と、ライナは言う。

それにルドルフは、一つ、頷き。

「なるほど、頭がおかしいか、なるほど、これでは、まだ駄目か、なら、なおさらこの術式を、この魔術を完成させるべきか」

と、ライナに聞かせるためではなく、ただただ、自分に言い聞かせるように、独り言のように呟く。そして、ルドルフは、ライナを見て言う。

「幼き魔術師よ、君の意見は参考になった。ならば、私は急がねばならぬ、すまないが疾くでていってくれないか？」

ルドルフは、なんの感情もなしに、そう言った。

それにライナは、気を悪くするでもなしに、しかし、それを拒否する。

「あゝそれりやお断りさせてもらっね。こんな魔術式くみ上げやがって。人が死ぬってのに、それを見逃せなんてできねえよ」

と、ライナは、顔に一ミリも動揺を浮かべずに、そう言う。が、しかし、ライナは、こんなものを、こんな強力な魔術師を一人で

相手していいのか？

と不安になる。

何故なら、あのルドルフには、まるで生気も、そして隙もない。立っているだけで凄まじいプレッシャーが、襲い掛かってくる。だからここは、もしかしたら、自分がいないことで、どうみても人を生贄にするための魔方阵で、それで人が死ぬかもしれないけど、でも、自分一人で危険なことをするより、母親に相談した方がいいのかもしれないと、そう頭の端っこで考える。が、しかしそれにライナは苦っ笑する。

（はは、んだよ、俺、人に頼らずに、ジェルメにすらもう会う気が無かったつてのに、もう、人を、親を頼ろうしてるなんて、色々と変わってきてんな、俺。

それに、こつこつ面倒くさいのは嫌いだったはずなんだけど……でもやっぱ、どうにも、人が殺されるのに我慢できないんだよな）と、そうライナは思う。

それは、頭で理解できることじゃなくて、心の問題だった。それは、人が、殺せない、殺されるのを見逃せない、そんな優しい、『寂しがりやの悪魔の』、ライナ・リユートの心だった。だから言う。

「それにな、俺ってば一度命を助けて貰って、そんなでもって心も救われてんだ。……なら、俺も誰かを救いたくなるってのが普通だろ？」

そうライナは言う。

それにルドルフは、無表情で興味無く言う。

「なるほど、それでは私の邪魔をすると？ 魔術師」

「まあ、そういふこと」

「ふむ、これも予定の内だ」

「んあ？ どうい意味だよ？」

「貴様には関係ない、戦うのなら、始めよう」

「あ、やっぱり戦う事になんのね」

「うむ」

「んじゃまあ、戦うとしますか」

と、ライナは少し笑いながら言い。

そして、
動きだした。

まず最初に動いたのはライナ。

指に、淡い光を浮かべ、そして、目にもとまらぬ速さで、空气中に光りで魔方陣を書く。

「求めるは雷鳴>>>・稲光」

書き始めて数秒で完成した魔方陣から呪文の詠唱と共に飛び出たのは閃光のごとき稲妻。

名は、いすぢ稲光。

ライナのもといた世界、ローランドでは最もポピュラーな魔術の一つ。

本気で打てば人一人など簡単に消し炭にしてしまう魔法。

それをライナは、死なないように手加減して魔術師ルドルフに向

けて放つ。

対してルドルフは、いつの間にか取り出していた理科の実験なのでよくみるようなフラスコを投げる。

「氷れ、氷れ、立ち向かえ、我を守れ、氷刃」

そうルドルフが唱えると、フラスコが割れ、中からとげとげしい無数の氷がライナに向けて飛び出してくる、が、しかしその氷はライナの稲光によって碎け、キラキラと氷の粒子を空气中にまき散らしながら稲光と共に霧散する。

が、もちろんこの程度で両方の攻撃は終わらない。先に動いたのはルドルフだった。

手に持っていたのは先ほどと似たようなフラスコ。それをライナに向けて、豪速で投げつける。

「燃えろ、燃えろ、敵を撃て、燃え散らかせ、炎陣」

プロのピッチャーすら目を疑いたくなるような速度で投げられたフラスコはとたんに火が網目状にライナに襲い掛かる。それにライナは、対抗呪文を唱える。

「求めるは水雲>>>・崩雨」

こんどは、魔方陣から洪水を思わせる水が、押し出してくる。

それが、フラスコから網目状に出てきた炎とぶつかり、そして蒸発して消える。

それにライナは愚痴る。

「蒸発とかマジかよ……。どんだけ強力な炎だ……」

確かにそう愚痴りなたくもなるだろう。

なぜなら火は水に弱いと言うのが定石。

ならば、崩雨があつた火を打ち消すのは当然。

なのに、蒸発し、両方が霧散することになった。

それは確かに愚痴も言いたくなる。

しかしまあ、そう、愚痴ってばかりもいられない。

何故なら、相手は確実に本気を出していなくて、そして奥の手を持ってきているだろうからだ。

それに、まだこちらにも複写眼があるにはあるが、正直フラスコからはじき出される魔術をコピーした所で使えない。

敵の魔方陣に浸食して敵の魔術を壊す魔術『蝕走』もあるが、見た所、中で混ざった液体を呪文で爆発させるような、あんな一瞬で炎などがでてくる魔術に使用できるとも思えない。

それにライナは頭が痛くなりそうだが、しかし、ならばこそ、先手を取るべきと、高速で二つの魔方陣を書き呪文を唱える。

「求めるは雷鳴>>>・稲光 求めるは雷鳴>>>・稲光」

そう唱えると、二つの稲妻はほとんどのタイムラグ無しにルドルフに向かう。

しかしルドルフは、それに無表情に、一つのフラスコを投げ一つ言う。

「荒れ狂う雷鳥」

その一言でフラスコが爆発し、そして稲光すら超える高熱を持った強大な雷が、体育館内に荒れ狂う。

「な!?!」

あまりに大きな雷に、ライナは驚く。

あの魔術師は、まだこんなにも強力な攻撃手段を持っていたこともそうだが、それを何食わぬ顔で発動できる実力にも驚かされる。

しかし、このままではあの雷が自分にあたるは必須。ならば、対抗呪文を書きあげる。

「くそっ、間に合うか……求めるは水雲>>

っっ!!」

だが、雷は、ライナに直撃した。

その一撃は、体育館にあったカーテンなどをことごとく燃やし、天井や非常灯などの電気類を全て破壊した。

不思議なことに、周りの時計は何一つ傷は付いておらず、高電によるイカレすら起こしていない。

そして、ルドルフの目の前で、

「ふむ、気絶した程度か、対抗呪文を放ったか……それとまただの丈夫なやつか……」

ライナは気絶していた。

おそらく直撃したのだらうと言う事が、服の端々に見える焦げ跡からも想像できる。

しかし、ライナもただ直撃をゆるしたわけではなかった。
ちゃんと、簡易で威力は落ちるが、崩雨みずみを放ち、威力の軽減をな
んとかできていた。

それにルドルフは、何の感慨も持たず、ライナの襟首をつかみ、
魔方阵の中央、時計の真上に放り投げる。

普通、少年くらいの重さだとしても、そんなぞんざいに時計の上
に放り投げるなど、時計を破壊、ないし、ヒビでもなんでも欠損さ
せてしまいかもしれないのに投げる。

ライナは、半径1.5メートル、直径で3mの時計の上にドカン
と放りなげらる。

しかし、時計にはびくともせず、戦闘でも壊れないような強化の
魔術をいつの間にか使っていることは確認せずとも分かった。

そしてルドルフは言う。

「ふむ、こいつは文献でも見たこともない魔術を使う。これは、
私のために確認するべきか」

そうルドルフは言い。

ライナの下にある時計を若干微調整するかのように動かし、そし
て、

「我は開く、このものの過去を」

ライナの記憶を切り開いた。

時計の闘技場（後書き）

ごめん戦闘描写下手で。

そしていきなり戦闘に入ったかな？ かんあるね。

あと、いちいち大げさにライナのきおくを覗き見よつとするのは。
まあ次回で

未来過去を見る錬金術師 現れる化物（前書き）

さて、現れたるは幸せを望むもの。

未来過去を見る錬金術師 現れる化物

ライナの下にある大きな時計は、逆しまに回り続けていた。

時計は回る過去に向かい回る。

回る廻る。

回る廻る周る。

時計は過去に向かい回る。

圧倒的速度で回り続ける。

「ふむ、魔眼か、それも見たこともない。それに……………異世界か」

白髪白衣の2mの巨漢の男、ルドルフ・エドガーはそう顎に手を置き、無表情に、無感動に、そして、無情にも、ライナの過去をこじ開けていた。

そこで見たものは、

どう見ても異世界の光景

魔眼による迫害

魔眼の異能

軍での無理やりな訓練

そして、崩れ去る幸せ

そして……………そして

「これは……人間か？ ……ありえない」

ルドルフを見た。

過去にさかのぼるごとに、とうぜん見るもの変わる、そして、とうぜん不可思議なことがあってもおかしくはない、もちろん異世界から来たのだろうライナだ、より不可思議なことがあってもおかしくは無い。

、がしかし、しかし、

それでも、これはありえない。

それは、どうみても、人間をやめ、根源そのもになるうとしている男だった。

そこに映し出されているのは金髪の男。

ライナ・リユートと同じで、眠そうな目をした男の姿が、そこには映し出されていた。

それは、そいつは神を出しぬこうとし、低級の神程度なら楽に越える力を持っていた。

もはや、こいつの力は人間ではない。

こいつは

化物と言うのも生ぬるい、『神

域』、そんな力を持った男だった。

そして、

「つつつ！！！」

すると、無感情で、無感動だったルドルフの額に玉の様な冷や汗が流れる。

それは、ルドルフにとって、初めての出来事だった。

「なんだこれは……」

ルドルフは、自分が冷や汗を流していることに驚きつつも、しかし、ライナの過去から目をそらさない、いや、目をそらせない。何故なら。

過去の映像のはずのその金髪の優男は、こちらを見て、冷徹な目でこう言った。

『やあ、あまり僕の息子のライナを苛めないでくれないかな？
じゃないと、殺すよ？』

そんなことを、男は言った。

それはあり得ないことだった。

何故なら、これはライナ・リユートの過去だ。

なのに、なにに何故こちらを視認しているかのように、見つめ。

そして話しかけているのか。

それに、それに、ルドルフは、

「ふむ……この魔術が、原因か？」

そう落ちついて、考察した。

この魔術は、ただの記憶を覗く魔術ではない。

言うなれば、映写機でもあり、覗く場所を限定的に網膜に映像として映し出すことの可能な魔術だ。

そして、この魔術工房限定だが、この魔術は、ゴドーワードのそれに近い魔術だと言える。

根源に一方的にアクセスし、相手の過去をやるうと思えばそのものの心情的に見、そして、代償はあまりにも割に合わないほど大きい、そのものの未来すら見れる魔術だ。

副作用と言えば、相手にも過去を見せると言う。あまり術者には関係ない副作用がある。

そして、この原因は、上記のとおり、根源に、多少でもアクセス

しているこの魔術に原因があるのではないか、そうルドルフは思う。玉の様な汗は引いてはいないがルドルフは、人形ならではの、人あらざる精神力で、そう考察する。

「なるほど、この男。肉体が根源に近づきすぎている。なら、もしかやこの男、この魔術に反応したのか？」

そうなのか？ 魔術師。いや、魔法使いに近いもの」

そうルドルフは緊張したように尋ねるが、しかし、男の姿は、元の息子を愛する父親の過去の映像に戻っていた。

どうやら忠告しかできなかったようで、その息子を愛する男のそれを、ルドルフは暫く見つめ、そして安堵の息を漏らす。

そして、それに自分で驚く

「安堵、か。このような人間の感情が、私にはあったのか……」

そうルドルフは漏らし、自分に驚く。

驚愕、緊張、恐怖、安堵。

それらの感情は、ルドルフは自分にはあり得ないと思っていた。しかし、

「……しかし、これでは、まだ足りない。まだ、私は人間ではない。い。」

まだ人間にはなれない。私の存在価値は生まれていない」

そうルドルフは呟き。

そして、

「私の願いは私の創作。私の自己の確立だ
そのために私は人間を食いものにする」

そう、ルドルフ無表情に言う。
そしてライナを見て言う。

「しかし、こいつの過去に収穫は無かった。まあ未来を見た所で同じだろうが……ふむ」

あのような、化物がいる世界だ。
未来が気にならないわけがない。
ならば、またあの男に合うかもしれないが、しかし、未来をのぞいてみる必要もあるか、と未来への扉を開く魔術を使う。

「我、異なる世界への未来を視認す。我、異なる記憶を視認す。
我、異なる君を視認す。

我、新しきものを視認す それは未来への冒険なり」

そうルドルフは、呪文を唱える。
すると、時計は未来へと高速で動きだす。
動き出す。未来へ動き出す。

そして、ライナの未来が映像として網膜に映し出される。
この魔術はただの未来を見る魔術ではない。
未来への分岐をみることが出来る魔術。

元々歩むべきだった未来、歩める未来を見ることが出来る魔術。
ライナが異世界からの訪問者だと分かったルドルフは、その魔術を使う。

代償は、人間としての感情と、記憶をリセットするという代償。
これこそ未来を覗くと言う代償。

割に合わないというより割に合う事のない魔術である。

しかし、人形であるルドルフは、それらの代償は痛くも痒くもない。

もともと人間としての起伏のないルドルフで。

そして、ルドルフの記憶は脳にもあるが、しかし、ルドルフは口ポとしての一面を持つ、なので記憶は脳と心臓、肺、足にとそれぞれにそれぞれのチップに同じ記憶を共有してある。

これは人形としての特権であろう。

なのでルドルフは、戸惑うことなく、この代償の大きすぎる魔術を使う。

未来を覗く魔術を。

「……ほう。これは」

ルドルフが見た世界は、今度はライナ・リユートが主軸だった。

それは、もう20に近い年齢のライナ・リユートだった。

それは、目に大きな光りを持ったライナ・リユートだった。

それは、止まらない笑い声を上げる、ライナ・リユートだった。

そして、そして、人間が、砂になり、砕け、破裂し、跡形もなくなる様相だった。

それを見て、ルドルフは、頷く。

「ふむ、それでも、『これ』は『人間』か、先ほどの狂った『化物』ではなく。

それでもこいつは、『人』か」

それは、二人の、ライナの友人であろう者が、ライナを止めるために、命をかけてライナを止める光景だった。

そしてライナが絶望し、そしてその後、一年後に、ライナが女と

旅し、笑ったり、苦しんだり、泣いたりする光景だった。

そして、それを見た後、ルドルフは魔術を消す。

これ以上見た所で、収穫はなそうだった。

何故なら、『これ』が、どうしようもなく人間だと言うのは分かったからだ。

それでも、魔術的、そして感情としての収穫はなかった。

あったのは、記憶のチップを覗くだけで、冷や汗がでる金髪の男の笑顔だった。

それだけはいくら感情をリセットされようが、あるはずのない本能的な恐怖の感情をあらわにさせる。

「……………つまらん結果だったか」

そうルドルフは言い。そして。

ルドルフはライナの首を持ち、ライナを部屋の隅に放り投げる。

ドゴッ！

と音が聞こえ。ライナが壁に叩きつけられた。

そしてルドルフは、呟く。

「しかし、やはり、魔術の発動は必須だな。

あいつも私の糧にするか……………」

まあ不確定要素も多いが、しかし、上手くいけば、

これで、我が機能も果たされる」

そういい、ルドルフは、魔方陣の中心にある時計の前にたち、前回作った。

時計のすぐそばに落ちてある、赤い宝石、賢者の石を口に含み呑みこむ。

ゴリツと、嫌な音と共に、喉を通過し、喉の肉がが所々破れて、入って言ったが、ルドルフは顔色一つ変えない。

それはまるで、痛みすらないかのような顔であった。

そしてルドルフは、呪文を唱える。

それは、結界内の人間をドロドロに溶かし、魂の、情報の塊にする魔術。

彼の聖杯戦争でライダーが使った結界とは違う。

それは、激しい痛みと共に、快楽と共に、熱さと共に、冷たさと共に、死ぬ魔術。

そしてそれは、精巧な結界で、ライダーの結界のそれ以上に醜い魔術であった。

外とは時間の感覚をホンのコンマに満たぬ時間ですらし、まるで魔法の域のレベルで外との隔絶を作り精巧に隠され、そして、結界内に入らねば魔術師には感知されない結界を作っておきながら。

もう一つの結界を作り、その効力は、中の人間を死滅させ、情報の塊にし、術者が喰らうと言う、もはや頭のおかしいと言うレベルの二重結界の大魔術で、確実に人にはできない数々。

彼の死徒27祖のワラキアの並列思考と、その肉体が必要なレベルの大魔術であった。

もはや、この人形を作った『ルドルフ』が何物かを疑いたくなるほどの最強の自動機械人形であった。

そして、ルドルフは、呪文を唱える。

手にはフラスコを持ち、そのフラスコの中身が呪文によって爆発する。

すると、中には、液体が入って、その液体が、ライナの崩水のごとく溢れた。

それは、水銀であり。そして、それすべてが魔力濃度の濃い水銀であった。

それが、フラスコの中から出てきたとは思えないほどの量で、床に溢れ、体育館全体に広がり、床を五センチほどまで浸水した。

すると、その影響か、床に置いてあった時計は全て機能を停止する。

そしてルドルフは言う。

この世の法則を捻じ曲げる、呪文を唱える。

魂の収集を始める。

「我が願いはアストラル。我が願いはアッシャーへ。アストラルがアッシャーにより全てをさらけ出し、我が世界へと留まり動きだす。我が願いは世界。我が願いは彼。我が願いは我

」

ルドルフが呪文を唱えるごとに、ドンドンと水銀の水面は波打つ。すると、浸水で止まっていたはずの時計は、急に過去に未来にとバラバラに動きだす。

それは、まるで人の命の時間を回すかの如く回りだす。

水銀は波打ち、渦を作り、魔方陣の周りを赤黒い光を放ちながら時計のごとく波が回り始める。

そしてその水面には、時計の1から12までの赤い光の文様が浮かんでいた。

それが浮かべば、最後の仕上げだった。

そう、最後の、仕上げの呪文を唱えるだけ。

なのに

「な、に……」

後は、水銀の中に人の魂を封じ込め、情報として自分に取り込む。後は本当にそれだけなのに、それを始めようとした時、いきなり全てが停止した。

水銀は途中で動きを止め、時計の文様は消え失せ、光りは赤黒から、金と黒と青を放ち始める。

「く、…… つつ……！」

なにかが、生み出されようとしていた。

それは、まるで狂った化物で。

それは、まるで魔法だった。

そして、暫くして光りが治まり、化物は現れた。

水銀の波に流されたのであろう、元々投げた場所とは大分離れたライナのそばに、化物は姿を現し、ルドルフに背を向けていた。そしてそれはライナをしばらく見た後、

笑った。

「あはは、折角忠告したのに、僕の息子に危害を加えようなんて、

本当に死にたいんだね？ 君は」

と、笑い。

そしてルドルフの頭上に何処からともなく、ライナが放ったのと同じような、しかしそれとは比べ物にならないレベルの強大な雷が落ちてきた。

それを、ルドルフは直前で気づき、何とか避けたが、しかし魔方阵の中心に合った大時計は壊れ、床の下まで抉れ、地面にまで大穴をあけていた。

ルドルフは、それに目もくれず、しかし、その雷を見て目を見開く。

それは、確かに魔術だった。

そしてそれを放ったのはまず間違いなく目の前の男。

それにルドルフは、冷や汗を流す。

「どうしたんだい？ ただの『真言法』だけど？ そんなに冷や汗を流して、詠唱もないのあの威力に驚いたかい？ それとも自分のしたことに後悔しているのかい？

……でも遅いよ、もう遅い。僕は忠告したはずだ。

そして君は確かにそれを聞き届けたはずだ。

なのに、君はその忠告を聞かず、ライナに危害を加えようとした。だから、もう遅いよ」

そう男は、眠そうな顔で言う。

そして、ルドルフは、男に畏怖をこめて言う。

「……お前は、誰だ。いや、何者だ……？」

「ん？ 僕かい？ 僕はリユース・リユートルー。ライナの親だ
それ以外に語る必要があるかい？」

そうして、ライナの親の、リユース・リユートルーは笑った。

未来過去を見る錬金術師 現れる化物（後書き）

リユーラか……元々出す気は無かったんだけど。

彼反則人間（？）だし。それに体の隅々まで魔法なんだよね。

だから、過去を覗くと言う事はその世界を覗くと言う事で、

さらに魔術的に根源が関わっているのならリユーラもいけるんじゃない？

とね。

まああれだね、リユーラが魔法使いじゃなかったら何なんだと。

まあリユーラがこっちにこれたのも色々な制約もあるので、次回に
どうなるのか、を見てください

あ、ルドルフの願いも今回出たし。

次でおそらくこれもラストです。

あとルドルフ（二人とも）も反則だよね。

てかもう錬金術じゃねえよな、魔術だよね、魔錬金だよね

しかしあれだね、ライナ仕事してただけなのにね。どんだけ不幸な
んだと

じっしておわる（前書き）

こうして今宵の幕は下りる。

人形の願い。

親の願い。

子の願い。

それぞれが願いが錯綜し、それぞれが涙を流す。

終わりはいつも突然。

ああなんと悲し嬉しか。

矛盾の先にあるのはさらなる幕開けの準備。

さて次回の苦悩の幕開けはいつのことか。

さあ、今宵は願いによって幸せの準備をしよう

じつしておわる

リユーラ・リュトルーは、ライナを微笑みながら見て、

「さて、ライナを治療しないと。水銀を大量に飲んでしまったよ
うだし、中毒になってしまう」

そうリユーラは優しく言う。

ライナの喉元から腹まで手をあて、そして無詠唱で魔法を発動さ
せる。

手に光が宿り、ライナの腹からなにかが通り抜け、水の様なもの
が掬いあげられる。

よくよく見れば、それが、水銀だと言う事が分かる。

そうして、リユーラは掬いあげた水銀を地面に捨て。

ライナを抱えたまま、思い切り地面を蹴る。

すると、

ズガンツッ！！

轟音と共に、周りの時計を巻き込みながら地面が抉れ、砕け、そ
して床が亀裂を作りながら抜け落ちた。

すると、ズゴゴゴと、水が抜けていく不快に抜けていく音をた
てて、その穴から大量の水銀は流れ落ちていき、ものの数十秒で水
銀は消え去った。

それは、ローランドの魔術、地面に穴を開け、砕き、亀裂を入れ
る魔術『倒地』ちがしおだった。

その魔術で、水銀はどんどん流れ出る、それをみて、リユーラは
一息を吐き、ライナをゆっくりと自分の胸に抱き直す。

「さて、君にはバツを与えないといけないね？
確か、君の願いは、自己の人としての心の確立、だったかな？
なら、それを君に与えよう」

そうリユーラは言い、そして、いきなりリユーラの手から、虫の
様な文字がうそぞと溢れ出て、それが、ルドルフへ襲い掛かる。

「う、があー!!」

ルドルフは避けようとするが、予想以上に動きが速く、い
かんせん文字が多すぎる。

まるで避けられず、文字がルドルフに纏わりつき、そして、口から、
鼻から、耳からと体の中に無理やり入っていく。

それにルドルフは冷や汗を流しながら、不快な顔をして、そして

「ぐあ……」

苦痛に顔を歪めた。

体がまるで業熱で焼かれるかのような熱さが走る。

ジワジワと、しかし、猛烈な勢いで、体中を熱が蹂躪していく。

彼は人形であるが、半分は人間なのだ。

魔術師のルドルフが、人間と機械の融合をテーマにし、わざわざ
神経を作り、感触を作り、血管を作り、と、人間に近づけた結果、
痛覚があるので、痛みと、熱を感じる。

そのせいで、ルドルフは、猛烈な熱に体をを襲われている。
それにリユーラは満足そうに眺め、言う。

「これでも手加減してるし、それに、一応感謝してるんだぜ？

笑う。

「く。これが……こんな不完全なものが……それに
これ
は……まさか……」

「あははは、うん、それが人間の感情だ。
人間の感情は不完全で歪、それゆえに儂い。
だからほら、君はちゃんと感情を得ていただろ？」

いや、ここは言葉を正すべきか、そうだね
君はち
やんと成長しただろ？」

その言葉に、ルドルフは硬直する。
その言葉の意味に、ルドルフは啞然とする。
そしてその言葉に
絶望する。

「な、に……それは……もしや……」

「ああ、君の想像通りだ。君には最初から感情が備わってるよ。
ただ単に、君の精神が幼いだけだ。ゆえに気付かない。
君、まだ生まれて間もないだろ？ 君の精神は成熟もしていな
ければ成長すらしていない。

それも、笑えることに君は成長を過去未来を見る魔術で自分で止
めてしまっている。

君、あれを何回使った？ あんなに簡単にライナに使ってこと
は、1回や2回じゃないだろ？

君は半分は人間なんだから機械の体だけじゃだめだよ。
人間の本質は肉体にあるんだから。

だからこそ、君には人間の肉体があるんだろ？ だからこそ君の
主は君に人間の肉体を作ったんだ。機械だけでは人間にはなりえ

ない、それは、人間に良く似た何かだ。

しかし、機会なんかじゃ魔術は使えない。

だけど、人間の体ではいずれ限界が出てくる、僕みたいにね、だからこそ機械だ。

君の主は機械に可能性を見出し、一つの『奇跡』を作りだそうとした。

あつ、そうか、君は余分に記憶があるぶん、とがって精神が成長したんだね、それじゃあ気付かないわけだ。あはは」

リユーラは、そう、笑うように言った。

決して存在は否定せず、生き方を否定するように。

そしてルドルフは、リユーラの言い方に、驚く。

「お前は、何故主の目指す到達点を知っている。いや、それ以前に……お前はここにどうやってきた」

「そんなの決まってるじゃん。僕が何もかもを犠牲にして、肉体系ら魔法にして、ライナを守りたいからだよ。こっちにこれたのも、『根源』って所を通過したんだよ、僕の生命を対価に払って。

その時に、君の情報もついでに入ってきただけだ

と、ライナが起きたみたいだ」

そうリユーラが、自分が胸に抱いているライナを見て微笑みながらそう言う。

それに、ルドルフは何も言わない。

下手に動き、あれの妨げになれば、自分は簡単に殺されるだろう。しかも、見向きもされずにだ。

自分では、魔術では勝てない。

いや、それ以前に彼は、なんて言った？ 肉体を魔法にした？

それは、もはや魔法使いの域だ。

自分は魔法使いに近いものと言ったが。

そんなモノではない、正しくあれは魔法使いだ。

それ以外に言葉は無い。

だから、あれには勝てない。

精神を無理やり成長させる魔法を使うやつだ。

とんでもない技術力をもつ機械の身の自分でも、あれには技術力リユラの面でも勝てない。 そんなことを冷静に、しかし、顔を恐怖で青ざめさせながら、ルドルフは思う。

その恐怖は、正しく人間であった。

だから、正しく人間であったルドルフは、反抗することをやめた。これ以上は、もう、無理であった。

そして、ライナは、少し、ぐずりながら、ゆっくりと目を覚ます。

「ふあゝ今何時だ…… って体が痛てえ！？ 何で…… ってそういや俺戦つてたんだっけか？

何で俺生きてんだよ…… まあ生きてたんならいいけどさ……。

ってあんたは誰だよ……

え？ 父……さん？

って何でこんな記憶が……」

「やあライナ、おはよう。よく眠れたかい？」

「え？ ああ……うん…… ってなんでだよ！？」

ライナは緊張感のない呑気なことを言いながら起き、そして、目を見開いて突っ込む。

眠そうな目は、正に父親譲りで、親子を感じさせる二人は、お互いに見つめ合った。

片方は、驚きで、片方は嬉しそうに。

ライナは、父親に抱かれながら、言う。

「父さん……なんでこんなところにいんだよ？」

ライナはとりあえず、色々言いたいことはあるが、そんな至極まっとうな意見を言う。

それが父さんだと分かったのは、ルドルフの魔術の副作用だろう。それにリユーラは、一つ頷き。

「そうだな、ただ会いたかったっただけじゃ、ダメか？」

「……………いや、それだと納得できねえよ……………」

「あはは、だよね、うーん……………言うなればさ……………さっきの『あれ』にも言ったんだけど、僕は根源を通してここに来た。それじゃあダメかな？」

そう言って、ルドルフを指さす。

それにルドルフは少しだけビクツとなったが、しかし無表情で、こちらを見ているだけ。

その反応にライナは驚くも、それ以上に驚くことにライナは耳を疑う

「はあ！？ そんな魔術師の目標から来たなんて言われても信じられるか！？」

「だよね〜でも事実なんだよね〜」

「非常識にもほどがあんだろ……」

「あはは」

「いや、あははじゃなくて」

そう言ってライナは呆れる。

ルドルフにも驚いたが、しかしそれ以上に自分の父親の天才さ加減に呆れを通り越して尊敬の念すら湧く。

がしかし、それでも、あることを恐怖を持って質問しなくてはならない。

「でさ……父さん、いつまで……こっちにいられんだよ……
……？」

「あれ？　なんで唐突にそんなことを言うんだい？」

「だってさ、父さん……結構、無茶しただろ？」

そう言いながらライナは、目に涙を浮かべながらそう言う。

それにリユーラは、困ったように笑みを浮かべて言う。

「ありゃ、ばれてるか。……うん、無茶したよ。たぶん、ライナの想像通り、僕はもう少してこの世から消える。そうだね、もしかしたらこの世界の『座』に行くか、それとも『根源』に溶け込んで消え去るか」

と、そこまでリユーラが言った所でライナの感情が爆発した。

「なんで、なんで俺なんかのためにそんなことするんだよ!？」

そう叫び、ライナは、目に浮かべた涙をついに決壊させる。

ポロポロと、涙が溢れ出て来る。

それにリユーラは少し怒ったように、でも、優しい顔で、ライナの頭をガシガシとなでる。

「何を言ってるんだ！ そんなの、親だからに決まってんじゃないか
いか」

「でも、俺なんか生きてても、迷惑しかかけないし……この複写
眼がある限り……大量虐殺のばけも」

とライナが言った所で、リユーラは腕からライナを落とす。

「つてえ……何を……」

ライナは尻から落ちて、尻を抑えながら立ち上がるうとして、

ゴズンと、拳がライナの頭にたたき落とされる。

「
つつ~~~~~!!」

ライナは頭を押さえながら、目の前の父親を見ようとしたがとたんに視界がひっくり返る。

訳も分からずいつの間にか体がうつ伏せになり、背中に、父親のリユーラが座っていた。

それにライナは

「な、なんだよ……」

そう言つて。

わけもわからずどこかそうとするが、リユーラはそのまま動こうとせず、そのまま泣きそうな顔で、でも怒った顔で、父親としてライナに言う。

「ちよつとおまえ、いい加減にしろよ。

くだらないことを恐がつて、人生を台無しにするんじゃないよ。なんのために僕らが命を懸けてるんだと思つてるんだよ。

ちゃんと幸せになるための努力をしてくれ。

毎日笑つてさ、ほら、お前が、新しく母親と思つている青崎つてのがいるだろ？

その人と楽しく暮らしてさ、好きなことかも作つてさ、誰よりも幸せになつてやるつて、叫んでくれよ。そうしてくれなきゃ僕ら…
…こんなにも必死になつてる僕らが…馬鹿みたいだろ？

それに、僕は父親だからさ、ライナには、最後に色々言つて逝きたいじゃないか。

もう何も言えなく会えなくなるくらいなら、その方が全然いい」

と、リユーラは、瞳に意思をこめて言う。

そしてライナは、ライナは言う。

瞳に、同じように意思をこめながら、涙を流しながら言う。

「親つて…… 大変なんだな……」

「ああ、大変だよ。でもその分、幸せだ。だから、君も、将来結婚して、子供産んで、育てれば良い。あと、複写眼は遺伝するつて言うけど、お前の瞳は遺伝しないよ、だから安心しろ。

だからさ、ちゃんと好きな子を作れよ」

と、リユーラはライナの上から立ち上がり優しげな瞳でそう言った。

ライナは思う。

将来への不安を気にするなと言われ。

瞳を気にするなと言われ。

命を大切にしろと言われ。

自分を大切にしろと言われ。

人生を大切にしろと言われた。

そして、ちゃんと好きな子を作れと言われた。

それに、

「うーん好きな子は……好み次第だからな……ちょっと難しいかもな……」

「あはは、おいおい、父さんの最後なんだからうんって言うてくれよ」

「まあ一応うんって言うておくよ」

「よし、流石は僕の子だ。じゃあ最後に仕上げだな」

「仕上げ？」

「ああ、ライナの瞳については、君の記憶から抜き取った伽藍の堂
つて場所に、一応使い間を送って詳しい事は君の母親に紙を渡しと
いたから、瞳については君のここの母親に聞くといい。」

あつ、なんで知ってるの？ って顔してるね？ そんなあの過
去をみる魔術のせいに決まってるじゃないか」

と、リユーラ言い。

「それでき、本当の母親は、君のすぐそばにいつもいるって、覚
えておいてほしい。」

それが、最後の父親の気持ちだ。

いや、やっぱライナに幸せになってほしいってのが、僕の最後の
願いかな？」

と、リユーラは笑い。

そして、ルドルフに向き直る。

その瞳は、冷たく、そして何物も映さないかのような瞳で、その
瞳でルドルフを見る。

それに、ルドルフは半笑いになる。

「それじゃ、今回の舞台に幕を下ろそうか

待たせ

たね、ルドルフ君。

律儀に待ってくれて感謝するよ。

でも、君は、僕が消えた後、何をするか分からないから

処分するよ」

そう、リユーラは冷たく言った。

背筋すら凍る、殺気を、ルドルフにぶつける。

それにルドルフは冷や汗を流しながら。

「ふ、ふはははは。やはり、見逃しては貰えないか」

そうルドルフが、震えた声で言う。

リユーラはうんと頷き。

「ああ、君の思考は少し歪すぎる。僕の魔術で成長した君は、より大人の考えを持っているだろう？」

正直、ライナ以外がどうなるうがどうでもいいんだけど、それじゃあライナが泣くしね、それに、ライナにいつ危害を加えるか分からない。

だから、自動人形 君を処分するよ」

「ちょ、と、父さん」

と、ライナは、慌てて止めに入る。

それに、リユーラは、困ったように笑い。

「どうしたライナ？」

「どうしたじゃねえよ！ なんで殺そうとすんだよ！？」

「どうしてって危険だからだよ」

「そんなの、俺だってそうだよ、なのに、なんで」

そうライナは、泣きそうに、危険なら、自分こそそうだと、リユーラに言う。

それにリユーラは、ライナの頭をなでながら。

「それはね、彼がまともな人間ではなく、人形だからだよ
人間じゃない何か、人間の肉体を持った何かだからだよ」

「どっぴいっ……」

と、質問すると、リユーラはルドルフがどういう存在なのかを、
教えて、ライナは驚く。

まさか、作られた存在だとは思わずに、驚く。
しかし、それでも、

「でも、人間だろ？ 半分機械だからって、意思を持って、心を
もって、なら、人間じゃねえかよ
殺すなんて、そんなの……」

そうライナは喚くように言う。

それにリユーラは、うーんと悩むように腕を組んで。

そうだ、とにこつと笑ってポンと、手をたたく。

そして、ライナの耳元で、内緒話のように囁くような声で言う。

「なら、ライナがあいつに勝てば、それなら考えてあげても良い
よっ」

と、リユーラは突然そんなことを言い出す。

それにライナは「は？」と驚き。

そして、

「な、なんで……ってか俺もう一応あいつに負けてんだけど」

なんて動揺して言い。

それにリユーラは面白そうに笑顔で言う。
それはもう腹が立つほどの笑顔で、

「なにライナならできるさ、一応あれも人間の体だ。

なら、勝機が無いわけじゃない。あれの強さは機械に頼った高速並列思考に、機械に頼った圧倒的な速度を生み出す強靱な肉体。それに、並列思考から生まれる強力な錬金術だ。

これだけなら勝てる気がしないけど、でも、勝機はある。

錬金術の方は工房を壊したから威力は弱体化してしね。

なら、ライナは天才だから、かてるさ」

と、お前ならできるさ、出来ない方がおかしい、いや、出来て当たり前だなんてことも言う。

それはもうイラツとする笑顔で、手を広げて。

それにライナは呆れ半分、面倒くささ半分で

「ほんと、父さん良い性格してんな……」

「それほどでもないよ」

と、皮肉もなんなくする。され、しかもその上でリユーラはルドルフに、言う。

それは、もう、めんどくさい、なんて言って逃げ出したいレベルの提案を、ルドルフに送りつける。それは、ルドルフにとって救世主の言葉で、ライナにとっては面倒くさいの一言を送りつけて買いとらしたいくらいの言葉だった。

リユーラは、言う。

「ルドルフ君、君、処分されたくないよね？」

と、

そのライナの叫びが、開戦の合図になった。

ルドルフは、ライナが叫んでいる所で、隙ができたと一気に間合いを詰める。

弓に番えた矢のように後ろに引き絞った腕を、一気に前に押し出し、ライナに殴りかかる。

その速度は、機械の体で人間の体を超えているせいか、異様に速く、異様に鋭い。

それにライナは慌てて気付き。

「つてあぶねえ」

紙一重で顔の皮一枚で避ける。

右の頬から血が流れたが、あまり気にならない程度なので気にしない。

だからライナは、そのまま自分の横を通り抜けて行った腕をつかみで引つ張り、

「いきなり攻撃してくんなよ!!」

「ぬお……」

と、勢いに任せて自分の方向に引つ張り突っ込ませ、その勢いを利用し足を払いでこかせる。

そしてそのままの勢いで追撃として殴りにかかろうとして

ライナは後悔した。

それは、

「水銀は怨嗟の声を上げ、強固な水路を作る」

と、懐からいつの間にもフラスコを取り出し出していたルドルフは、それを放り、ライナの頭上で爆発させる。

すると、瓶の中から魔力濃度の高い酸に近い水銀を溢れだし、それが、意思を持ったかのようにグネグネを動きだしライナに振りかかるようにする。

が、ライナもそれに飲み込まれるほどに弱くは無い。

そのまましゃがみ込み、ルドルフの方向に飛んだ。

そう、わざわざ術者の方向に飛んだ。

それはルドルフを、術者本人を盾にするためだ。

「ふん、その程度、水路は小道に塞がれる」

しかし、そこまでは甘くなかったようだった。

ルドルフはそう呪文を言うと、途中で魔術がキャンセルされたのか水銀がバケツの中の水をぶちまけたかのような音を立てて地面に落ちた。

「はあ！...」

そして、ルドルフは近くに転がり込んできたライナをとらえるために腕を伸ばす。

が、ライナはそのままルドルフに捉えられないように腕を地面にバンツ！と叩きつけ跳ね起き、とっさに自分に迫るルドルフの腕を蹴りあげ、後ろに飛ぶ。

だが、ライナは苦悶の表情を浮かべた。

「~~~~~つつつ！！ 痛つてえ〜。なんで蹴った方が痛いんだ

よー!」

「あはは、そりゃ機械だもん」

「あつそうか、厄介だな。あ、俺もう帰って寝ても良いかな。めんどくせえ」

「じゃああれ、処分しちゃうぞ」

「あ、もう、面倒くせ」

と、ライナはぼやきながらも、高速で指を動かし、空中にある魔方陣を半瞬で完成させる。

その魔術は『紅蓮』炎を生み出す魔法。

「一求めるは焼原>>>・紅蓮(もとめるはしょうげん>>>・くれない)」

空中に描かれた光りの魔方陣から、炎弾がボン、ボン、と3発ほど飛んでいく。

それに加え、ライナはその間にもう一つの魔方陣を書く。

が、その前の火炎弾はバシユと言う音と共に消えた。

それに目を向けると。

「ふん、この程度水を使えばよい」

と、ルドルフはいつの間にもやらの水の錬金しており、水によって火炎弾は消し去られ、そしてルドルフは地面に落ちている水銀の水たまりを触り、何事かを呟く。

呪文の詠唱、構築は同レベルか、少しライナが上なくらいだが、

ルドルフは攻撃の高速思考の先読みで同レベル以上まで実力を上げていく。

それにライナは舌巻きながらも、しかし水銀の水たまりを触り、何事かを呟いているルドルフにライナは怪訝な目を向けるが、すでに完成している魔方陣に対して呪文を唱える。

それは、ライナがもつとも愛用している魔術。

「求めるは雷鳴>>>・稲光(もとめるはらいめい>>>・いづち)」

と、魔方陣から雷が飛び出てルドルフに迫る。

がルドルフも 同タイミングで呪文の詠唱を終えていた。

「水銀の小道には大いなる魂と大いなる力が宿る。

その小道は万物の通り道」

そう、ルドルフが言う。

水銀の水たまりが大きな波になりライナに迫る。

それにライナは目を見開くが稲光は止まらず水銀の波にぶつかる、稲光は少しだけ威力を弱めただけで打ち消された。

そうなるのを知っていたのかライナは高速で後ろに飛び退き、水銀の波をやり過ぎす。

が、安心はできない、何故なら。

「んだ？ あの質量は……それにあの魔力密度……何かやってんのか？」

そう、水銀の水たまりはあまりにも小さかったのに大きななみになっただ。

水たまりの大きさは例えるならば文庫本一冊がせいぜい治まる程

度の大きさだ。

なのに、あれは、どういう事だ？

それに、あの魔力密度。

今までのルドルフの魔術もそれなりに大きな密度であったが、それでも、大きすぎる。

なにか、触媒でもあるのか？ それとも子の工房に何かまだあるのか、とライナが考えていると、リユーラが言う。

「あいつさ、賢者の石を体内に納めているから魔力は無限で、触媒いらすだぜ？

あいつこの空間いっぱい水銀を溜めてたし。それも賢者の石の力だ。

あつ、そういやライナ気絶してたんだっけ」

なんて、とんでもない事を言い出す。

賢者の石

あらゆるものの触媒になり、所有者の力を圧倒的に伸ばすと言われている賢者の石。

それが、ルドルフの体内にある。

それは

「はあ！？ そんなに凄い奴なの！？ 勝てるかあああああ！」

そう、圧倒的な技術力を持っていると言う証。

何を考えて最初は自分との戦いで賢者の石を使わなかったのかは分からないが、使っていない時から自分を圧倒していたやつに賢者の石をもたれたら勝てるはずがない。

しかし、リユーラは言う。

笑いながら、何を言っているんだと言わんばかりに、言う。

「あはは、何を言ってるんだよライナ。全然弱点があるじゃん。使うのをためらってないで複写眼を使ってみるよ、面白いものが見えるよ?」

と、複写眼の使用をライナに進めるリユーラ、それに従いライナは一つ頷き。

しかしとりあえずルドルフから目を離さず質問をする。

「えっと、複写眼を使えば何かみえんの?」

「見れば分かるよ」

「そう?」

「うん」

「じゃあ よつと」

と、ライナは忌み嫌う複写眼を使う。

それで、ルドルフを見る。

今のルドルフは、そう、魔力の塊の様なものだった。

あたりまえだ。賢者の石で際限なく最小の力で大きな術を使えるのだ。

今ここで大きなものを使われれば、ライナは間違いなく死ぬ。

が、リユーラがいて、そしてその息子のライナだ。

ライナが死ねば確実のルドルフも死ぬだろう。

リユーラの手によって。

なのでそこまで大きな術は使えず、しかし、怪我や死なないようにするような連金はしてくるだろう。

例えば先ほど使った酸を降らすようなものなど。

しかし、今はそんなことは関係なく、リユーラに言われた通り、ライナはルドルフを見る。

くまなく、隅々まで、それで、リユーラの言っていることが分かった。

それは、

「……………はぁ？　そういうこと？」

「そう、そういうこと流石に気付いたか、指すが僕の息子だ」

と、リユーラが親ばか発言をした所で、ライナは指を動かし高速で魔方陣を書きあげる。

それにルドルフは反応し、地面に溜まっている水銀に手を触れ、呪文を唱える。

が、ライナは笑う。

「遅いよ。俺が父さんと喋ってる間に使うべきだったなそんなじゃ

求めるは侵入>>>・蝕走」

とライナは呪文を唱えた。

すると、魔方陣の中心から黒い煙を生み出し、槍のようになって、高速でルドルフに向かっていく。

それをルドルフが迎撃しようと呪文を紡ぎ、先ほどと同じように水銀が波を打って襲おうとするが。

それに、ライナは

「だから遅いって」

と、黒い煙がルドルフに呪文を言わす前に体全体を包む。
それにルドルフは声をあげそうになるが

「なにも、ない、だと？ お前……何を
ぐああああ」

ルドルフはいきなり顔から地面に一直線に受け身もとらずに倒れた。

まるで、体の力がとたんに抜けたかのように、だ。
それに、ルドルフは心底わけのわからないといった表情で言う。

「何をした……」

そんなルドルフの言葉に、ライナはライナは、面倒くさそうに頭を掻きながら。

「それさ、反魔法だよ。しかも『侵蝕』系の、ここまで言ったら分かる？」

そうライナが言うと。

ルドルフは、目に見えて驚く。
冷や汗を流す。

その答えを、ルドルフは分かってしまったからだ。

「まさか……お前……」

「そうだよ、お前の体の節々は魔術のよって接合されてる部分が多かった。

そりゃそうだ、肉体に半分近く機械なんて、拒否反応で即死んじまうからな。

だから、魔術で繋ぎ合わせた。だからそれに、反魔法を使って使用不可能にした訳。

まあ今回は俺の勝ちだけどき、ルール無用だったらこっちが負けてたよ」

なんて酷くあっさりと言いは終わったが、そうライナは言う。

それは、事実上勝利宣言で、そして、負けを認めたようなものだった。

それにリユーラは満足そうにうなずき。

そして、

「そんじゃあライナの勝ちだ。ルドルフ君、君、助かったね処分なしだよ」

そうリユーラはいうが、ルドルフの顔には疑問が浮かぶ。
本当に何故？ と言う表情を浮かべて

「何故だ？ 私は負けた。ならば死ぬのは当然」

「いや、僕の息子が勝ったら君を見逃すって事をさきにライナと約束したからその話は無効なんだ。

ごめんね」

と、リユーラは腹の立つ眠そうな笑顔で言う。

それに、ルドルフは呆然とした顔で、固まる。

それを無視してリユーラは言う。

「さて、出ようかライナ？

ここに掛けてあった認識疎外と、外界遮断はなんか切れかけだか

ら

ここにいと不味い事になるよ？」

と、そんなことをリユーラは言い。

それにライナは驚いた表情で、うんと言い。

外に向かう。

外に出て、太陽の光を浴びて、平和な外の光景を見て、そして、結界も、異界と化していた世界が何もかもが解かれてるのを見てライナは驚く。

リユーラを見ると。

結界は全部解いたんだ。と優しく言う。

それにライナも苦笑いして、自分の父親の天才ぶりに呆れて。

そしてまるで暗闇に放り込まれた子供の表情で、リユーラに顔を向ける。

「これで、父さんともう会えなくなるんだな……………」

なんて、泣きそうな顔で言う。

それにリユーラは優しい気な顔で、ライナの頭を撫で、そして、ライナを担ぎあげ、抱きしめる。

それにライナは何も言わず、なされるがままになる。

それは、本当に最後の抱擁で、最後の親の愛情だから。

だから、嬉しそうに、ライナは抱きしめられる。

何だかんだ言っても、やはりライナは小学生と言う幼い時分なのだ。

だから、泣いたって、おかしくなから。

泣く。

もうそれは大きな声をあげて泣く。

周りの、部活で通りかかる生徒を気にすることもなく。

子供らしく泣けなかった分まで泣く。

泣いて、泣いて、泣いて、泣いて、そして、しゃっくりをしなが

らライナは徐々に落ちついて。

それから、担がれたまま、リユーラに言う。

色々聞かなくちゃいけないことがあるし、今のうち聞いとかなければいけないことがあるから。

「母さんは、どんな人だったの？」

そんな大切なことを聞く

それにリユーラは、微笑む。

「母さんはね、とても優しくて、ライナと同じ瞳の色をしていたんだ

父さんはね？ 母さんに一目ぼれして、母さんにアプローチしまくって結婚したんだ。

貴族と平民の結婚は色々障害があっただけ。それでも幸せで、それに周りに文句を言わせなくするために地位も上げた。ああ、言い忘れてたけど、ライナは貴族の子なんだよ？ 僕貴族だからね

僕のせいで没貴族だけど。あはは

と、リユーラは楽しそうに笑う。

それはもはや、母さんのことではなく自分のことじゃんなんて言いたくなるが、それでも、父親がどれだけ母さんのことを好きだったかが分かる。

それに、ライナは嬉しくなる。

俺の母親は、そんなにいい人だったんだな。

と、嬉しくなる。

だからライナはもう一つ言う。

「それじゃあ父さんは、俺を産んで、嬉しかった？」

「当たり前だろ？ 父さんはライナが生まれてきてくれて、凄くうれしいさ。」

それは母さんも同じだろうさ」

とリユーラは言い。

優しくライナの頭を撫でる。

髪をさらさらと、気持ち良さそうになでる。

そして、リユーラ寂しそうな顔になる。

「 ああ、もう時間がないみたいだ。

何かあるなら早めに聞いてくれよライナ？」

「え？」

と、気持ち良さそうに撫でられていたライナは、リユーラを見ると、足からどんどん粒子と化して消えていっているのが見えた。

それにライナは泣きそうになるも、最後まで、父さんに甘えたいから。

だから話しかける。

「じゃあ、さ、父さんは、いや、父さん。最後に何か、言ってくれないかな？」

何でもいいから」

ライナは最後に、父親の話聞きたいのか、そう言う。

泣きそうになる心を抑え、耳を傾ける。

すると、リユーラは嬉しそうに頷き。

口を開く。

「それじゃあライナ。最後に色々言わせてもらっけど。幸せになれ。これは呪いとして君に送るよ。呪いの方が強力だからね」

と、あははと言いながらそんなこと言う。

それにライナも苦笑いしながら頷く。

そしてリユーラ言う。

「あとさ、好きなことかも作れよ？ ああ、それに、将来は結婚して、幸せにくらしなさい。

まあ好きなことかは自分の意思次第だから焦らなくても良い。

うーと、後は……」

と、リユーラは言いながらももう腰の半分まで消えかかっていた。

それにライナは何も言わない。

まだ、抱きしめて貰っているから。

まだ何も言わない。

「あつあとさ、これは大事。そうこれが最後だ。

じゃあ言うから、ちゃんと聞くんだぞ？

う、んあーあーよしそれじゃあいうぞ。

ライナ、君は君のいきたい道を進みなさい。何物にも負けず。

なにものにもめげないように生きなさい。

でも、今の君はまだ弱い。だから、ライナ、君の街の郊外の森の様な場所に行きなさい。

そこに、君と似たような子供がいるはずだ。

ライナよりかは絶望を味わっていないけど、それでも似たような存在だ。

いや、中身だ。

だからライナ。一度だけでも、見に行きなさい。

君の身体能力ならできる。つまり忍び込めってことだ。

泥棒のようにね。あはは。

家名は『両儀』って言うんだ。

これはそっちでは意外に有名だから、すぐに分かると思う」

と、リユーラは言った。

それにライナは頷き。

そして、リユーラは寂しそうに言う。

「うん、これで最後かも。僕の体もなくなりそうだし、ごめんだけどライナ、

もう君をだけなくなりそうだからもう下ろすね」

と、ライナを下ろす。そして、それに泣きそうになる。

けどリユーラは、それでも、抱きしめる。

もう抱けないからといって、抱きしめられないわけじゃないから抱きしめる。

最後まで、抱きしめる。

そして、最後に一言言った。

「ライナ。僕は君の幸せ願っているよ。愛してる、ライナ」

と、そう、優しく微笑み。

ゆっくりと、ゆっくりと、消えていった。

残ったのは、何も無い空間。

そこには、父親がいたはずなのに、今は誰もいない、残ったのは風景だけ。

それにライナは泣きそうになるが、それでも、ライナは歩きだす。時間はそろそろここに来て一時間が経過する。

車もそろそろ迎えに来るはずだし。

それに、いつまでも泣いていちゃ、父さんが安心できないだろうから。

だから、歩き出す。

リユーラの言葉を、父親の言葉を胸に刻み。

前へと歩き出す。

そこは、体育館だった。

そいつは、座り込み、何かを考える。

白衣に2mほどの巨漢。

白髪で、堀の深い顔をした男。

名はルドルフ。

そいつは、考えていた。

「あの少年が私を助けたか。やはり、どうしようもなく人間だな。私も、あのようになれるだろうか」

そう考え、ルドルフは、自分の口を触り、驚く。

「ほう、私が笑みを浮かべたか。これも、感情と言っちゃつか。ふむ、歪で、泣きそうなのに笑いそうで、苦しいのに嬉しい。いびつだが、悪くない……」

と、ルドルフがそう言い。

そしてルドルフは外に向かい歩きだす。

体の方は、一時的な魔法だったのかすぐに動くようになった。

それで、ルドルフは、自分の主の元へと帰る。

一から、やり直して、自分の一製作者（父親）のもとに帰るために。

「親子、いいものだ……」

親子仲良くなれるよう夢見て。

いじつしておわる（後書き）

さて、つまんね。と思った方。仕方ないね。

面白いと感じたかたありがとう。

でも今回は全社の方がかも。

何故なら無理やり終わらせたから。

あとで加筆修正とか修正とかするかもしれないけどそれはすいません。

あと、今回であれなので、次回両儀に会いに行きますと思いきや
橙子さんの会話です。

その次両儀で子供式とのやっとの対面だね。

そしてもはやこれ伝勇伝と化しそうになった所に型月に戻ってくる
と言うね、荒技。さて、肩つきの雰囲気に戻そう。文章の方もつい
つい伝勇伝ぼくしちゃったし。あゝ小説むずい。

日常への帰還（前書き）

超更新遅くて悟メーン

日常への帰還

青崎橙子は珍しく、眉間にしわを寄せ、紙片を呼んでいた。

それは、リユーラが持ってきた3枚の用紙。

それには、ライナのことと、そして、ライナのことを頼むと書かれた文章だった。

それを見て、橙子はメガネをつける。

「ふう、厄介な文章ね。ライナは本当に、化物だったなんて。

まあ私が言えた義理じゃないけど……ふむ。

まさか根源の化物が瞳にいるなんてね……」

『根源の化物』それは紙に書いてあった言葉。

ライナの瞳には寂しがりやの悪魔と言う全ての式を解くものと言う規格外の化物がいるらしい。

その化物は、元は根源そのものに近く、全ての式をつかさどるものだったらしい。

まさに神。まさに根源。

ライナの瞳は、かなり危うい。

恐らくライナの瞳は、封印が解かれれば根源すらひも解くかもしれない。

それだけ規格外だった。

「ふう、それにしても、ライナは帰ってきたら説教だな。

勝手に魔術師に、しかも工房に殴り込むなんて無謀も良いところだわ」

そう言い、橙子はメガネをはずす、すると、意識が切り替わる。

そう、暴力的なペルソナに切り替わる。

そして、メガネをはずし、30秒後ライナが扉を開けて入ってきた。

「母さん！ 俺ーっつっ」

パンと頬を叩く音がした。

それは、橙子がライナの頬はたいた音だ。

「っ、っていきなりなに

いたいたいたい」

橙子はさらにライナの頬叩く。

それにライナは耐えきれずに、

「な、なんかごめんだからちよつとやめて」

そう言って土下座した。

ジャパニーズ土下座。

そう、ライナの勉強のたまものだ。

微妙な知識だと言つのは否めない。

橙子はライナに向かい言う。

「さて、ライナ。私はお前に説教しなきゃならない」

そう言つと、ライナは落ち込んだ顔になる。

自分も、今回の、魔術師の工房へと単身で行く愚かさを分かっているのだ。

「うん、勝手に工房に突っ込んだのは謝るよ。早まった。

ごめん母さん」

そうライナは謝る。
それに橙子は一つ笑みを浮かべ、

「まあ分かってるのならいいよ、次こんなことがあったら容赦はしないから」

そう言っただけ笑みを濃くする。
それにライナは

「うっ、わ、分かったから黙って鞆を取り出すのはやめよう!? それ使い魔だよな!? 次は容赦しなっただけじゃん!? っ、ぎゃあああああああああああああああああああ」

容赦なく猫の影のような使い間にライナはボコボコニされる。
そして橙子は言う。

「なに、次は使い魔を二対同時に使っただけ意味よ」

そう言っただけ楽しそうに笑みを浮かべ、橙子は事務所机に帰り、書類を読む。

そして、気付いたようにボコボコニされ满身創痕なライナに顔を向け。

橙子は言う。

「まあお帰り、と言っただけおこづか。
お帰りなさい」

そういつと、ライナは少しキョトンとし、
そして笑みを浮かべて。

「うん、ただいま……」

そう言って本当に家へと帰ってきた。

「さて、ライナ、お前は両儀に行きたいんだっただか？
なら、家だけは教えておいてやる」

「へ？　なんで知って……ってそうか、父さんの手紙か」

「まあそう言う事、それじゃあ、好きにきなさい」

「うん、ありがとう母さん」

そうして、両儀への道が開かれた。

橙子はメガネをかける。

「あ、あと学校へもちゃんといかないといけないわよ」

「う、簡単すぎてあんまり面白くないんだよね」

「それでもよ、社会に出たいなら、それなりの体裁は気にしなさい」

とかそんな話もあった。

両儀の門（前書き）

今回は……さて、どうだろうか。

両儀の門

「ふわぁ……忍びこむったってなあ……これ、結構難しいぞ……中にいる人間……強そうなやつばかりだしさ……ああめんどくせえ……」

ライナは、両義家の家のすぐそばにあるまるで森のような木々の中で、そう愚痴をこぼしていた。

しかし、愚痴をこぼすのも仕方がないのは確か。

それは、中の人間が自分と同等か、それ以上に強い人がいるからだ。

それが、中から静かで清らかな、そして鋭く大きな気配がする。

両儀家は剣の一族だ。

なのでおそらく剣の稽古中なのであろう。

何故ならその気配は、もう一つのそれなりに強そうな小さな気配と一緒に、気配を大きくしたり小さくしたりと、強弱をつけて打ち合っているようであった。

それはおそらく、母、蒼崎燈子から聞いた、両義家の頭首と、その子息両儀式であろう。

両義要という息子もいたようだが、それは頭首という座から外れているらしく、稽古はしてもしなくてもいいそう。

稽古をしている片方の子供の方、両儀式は、自分のほうが強いから問題はない。

しかし、問題は、もう一つの大きな気配。頭首のほうであった。

これは、正直不用意に近づきすぎると察知されるんじゃないかなんて思わされるほどの実力者である。

「ったく、こりゃ本当にめんどくさいかもな」

どっか入れる場所は……まあここは定番の裏庭からかな……」

そうライナはいい、こそこそと、木々を伝いながら静かに音を立てずに、まるで忍者のごとく家の裏側に行く。

そして、

「おっ、ここがいいかな。

たく、いろいろと面倒くさいな。

ってかこの家大きすぎて裏までくるの時間かかったじゃんか」

なんて愚痴るも、しかし、異様に高い、塀を越え裏の庭に侵入し、そして縁側の障子を開け、ライナはゆっくり入る。

そして畳の部屋に出る。

そこは、ちよつとした座敷牢であった。

旧家である両儀家だ、確かにこのような場所があってもおかしくは無い。

だから、気にする必要はないであろう。

そう思い、ライナは畳に足跡をつけず、泥もつけず、音も立てさせないように靴を脱ぎ。

「ってか両儀の誰に会えば良かったんだっけ？」

と、ライナはそこまで言って今さらながらに気づく。

「……ってか両儀のだれかって誰よ？」

父さんは子供っていつてたけど、その子供は二人いた気がするんだけどさ。どうすんのよ？

次期頭首のほうか？ それとも頭首の座から離れたほうか？

……普通は次期頭首のほうなんだろっけどさ、ううん。

断定はできないし……」

まさに盲点であった。

いや、盲点つてレベルではないだろうがそこに頭の回らなかったライナは少し落ち込む。

そして気づく。

「うえ……下手したらこの家全体めぐってあわなきやなんねえじやん。

それに稽古している方の両義だったら……めんどくせえな。

もしかしたら現頭首様にあっちゃんかもしんねえし……

はあ……なんでこういう家は大概閉鎖的なんだ……？

忍び込むとか俺めんどくさいから勘弁してほしんだけどさ」

そう言いながら、ライナは独り言をやめる。

そして、めんどくせ〜と言いながら、流石に座敷牢から家の中に

は 入ろうと思えば魔法をぶっ放して壊して入れるがそう

言うわけにもいかず 入れないので、仕方なく「別の所から

入るか」とそう言いながらも来た場所に振りかえろうとして、

「そこの君、誰かな？」

しわがれた。歳をとったようなじいさんの声がすぐそばで聞こえてきた。

それに、ライナは驚いたように、一瞬跳ね。

そして振り返る。

するとそこには、目元の優しそうな、爺さんが、椅子に座っていた。

それに、余計に目を大きくする。

何故なら、それには、気配が極端になかったから。

今声をかけられるまで、まるで気づかなかつたから。まるで、そこに唐突に現れたかのような錯覚。それほどまでに異様な気配のなさ。

ライナが黙っている、その爺さんは言う。

「ここに忍び込めるなんて、その歳で、すごいな」

爺さんが驚いたように、そう柔らかな笑顔でそう言う。ライナは、それを見て、言う。

「ええと……あんたは……」

ライナがそう聞くと、其の爺さんは言う。

「私かい？ 私は前当主、と言った方が分かりやすいかな？」

その言葉に、驚きと違和感を覚える。

驚きは、言わずもがな、前当主のことだ。

しかし、もう一つ、違和感について、そう、それはまるで変なのだ。

何故なら、まるでおかしかったのだ。

前当主、という事は両儀家のものだ。

それも、当主になったと言うほどの者。

なのに、なぜこんな所に幽閉されている。そう思う。

すると、爺さんが、何も言わない自分に向かって言う。

「君は……ああ、似たものか……」。

なら、式に会いなさい。

私と言えるのはそれまでだ。
それと彼女に……」

そう言って、爺さんは言葉を止める。
そして、優しそうに瞳を緩め、

「いや、それは私が言うべきか……。
今のは忘れてくれ

なに、私のことは私がするだけのことだからね。
君は、式にあつてくれるだけでいい。

それだけで十分だ。
さあ、行きなさい。

似た者同士の君たちは、一目見ればわかるだろうから」

そう言って、爺さんは瞳を閉じる。

そのまま、眠りに入ったようだった。
それをみてライナは頭を掻いて。

「不用心だなあ……それに言うだけ言って寝るとか……
俺なんも聞いてないしさ……」

とそこまで言って。

「ま、名前が分かったただけ感謝しくよ」

そう言って、ライナは座敷牢から出て、別の入口を探すために、
高い塀を越えて、他の入り口を探す。

そしてライナは思う。

（変な爺さんだったな……まるで、なにかを押さえつけてたよう

な感じだ……)

そう思う。

しかし、其の考えは外れてはいない。

なにより、本当のことだからだ。

あの爺さんは、何十年と正気を保っていなかったのだ。

それが、何の因果か、ライナを見た瞬間に正気に戻っていた。

それは、まるで、ここから先にライナが関わることを分かっているかのように、ライナの『瞳』を見て、そして正気を取り戻していた。

それにライナは気付かない。

それにライナは瞳を、本質を見られていたことに気付かない。

そうして気付かないままライナは、式に合うために動く。

まるで、そうあることが当然のように。

それは確かに、父の、リューラの言葉も関係があったであろうが。しかし、今は違う。

何故なら、ここに来てから、無意識的にも、そして意識的にも会いたいと思っている。

無意識的に思っているのは、なにか言いしれぬ思い。

意識的には、そう、この両儀の家に来てから、ライナはずっと思

っていた。

いや、感じていた。

それは、瞳が疼いていることを。

瞳が、恐怖するようになり、歡喜するようになり、笑うかのようになり、疼いている。

それに、興味と、そして恐怖をない交ぜに、この元凶に会いたい
と思っている。

ライナは瞳を手で抑える。

（この疼きがなんなのかは知んねえけど……さて、鬼が出るか蛇
がでるかかってね、

ああ〜できれば蛇の方がいいな〜そっちの方が対処しやすいし……
まあどっちが出てもめんどくせえだろうな〜）

128

と、そう思いながら、

ライナは、静かに別の窓口から気配を極端に殺し、忍びこむ。

今度は、入口付近の、しかし人気の無い場所であった。

そこは、廊下。

左側は窓、右側には襖といった場所であった。

そこに、人がいないかどうか確認し、ライナは入る。

すると、入った瞬間に、運悪くいきなり襖が開いた。

それにライナは「いっ!？」と思わず声が漏れる。

が、すぐに声を引っ込める。

しかし、そいつに声が聞こえていたのか、その襖から出てきたもの
の目があった。

そしてライナは、一瞬硬直した後、驚愕する。

何故ならそこには、

一人の剣道着を着た少女がいた。

それは、お目当ての、橙子から聞いた話そのものの少女だった。

そいつはまさに、両儀式。

そつてそいぶ、

意識が赤い世界に移動した。

瞳の複写眼が無理やり覚醒し、

両儀の門（後書き）

唐突にであう。

なんかいいよね。

予定調和で会うよりなんか微妙に現実味があるよね。

予定調和で会うつつもりが会えなくなるってのも良いよね。

そして思わぬ所で遭遇。

これってなんかわくわくする。

これこそファンタジーてきがるね

赤い世界

そこは、赤い世界だった。
まるで血のごとく、赤い壁、赤い床、赤い天井。

そこは、ただの廊下であった。

そこでライナは、いつもは眠そうな目を見開いて、現状を、いきなり現れた世界を、確認する。

「……んだよこれ？」

そう、面倒くさそうに言うも、動揺を隠さないでいる。
そして、暫く見届けた後、前を向こうとした。
が、

「……いつ……頭が……」

急に、頭が、ハンマーでぶん殴られたかのように痛みだす。
その痛みが、ゴツ、ゴツ、と、等間隔現れては消え、ライナはあまりの痛みで声を出せない。

あまりの痛みで頭を両手で押さえ、床に倒れもがくが、一向に痛みが引く心配がない。

そして、痛みを誤魔化すかのようにライナは声を絞り出す。

「うあ……あ……んだよ……これ……き、おく、か？」

ライナは、頭を両手で押さえながら、しかし、何かを見るように、思い出すように、痛みで霞む瞳で、宙空を見つめる。

そうして、見えたものは、

「俺は、ここに、来たことがあんのか……？」

そう呟く。

しかし、ライナは、ここに来たことは無い。

確かに無いのだ。

が、未来の、自分は、確実に、ここに来たことがある。

そう、それは、未来の記憶。

ルドルフが魔術を使って見せた、未来の記憶。

しかし、それは、断片的で、かすれて、見えづらい。

見たことも無いほどの金髪の美人の女、意地悪な顔をする銀髪の男。

それらも見えるが、こいつらが誰かは分からない。

だが、今は、そんなものより、ここの記憶だ。

何故かこの記憶が、自分のものだと思えることができる。

が、今はそんな確証なんかよりも何故か記憶にある、この赤い世界を見るために、この記憶を優先的に掘り起こそうとする。

そして、そこで見たものは、

そう、これは数多の人間を……殺した記憶。
その、化物を見た瞬間に、見えた。
ある記憶。

それは、戦争。

そこで、自分が、自分が、あまりにも沢山の人を
それが、流れ込んできた。

そして、

「
」

痛みが急に、消えた。

「……はあ……はあ……はあ……」

急に消えた反動か、体をピクリとも動かさず、床に横たわりながら、荒い息で呼吸する。

その姿は、まるで死ぬ一歩手前で呼び戻された、死刑囚の様だった。

ライナは、息を整え、起き上がろうとした。

だが、まだ、これで、事態が収束したわけではなかった。

ライナが、体を起き上がらせようとした瞬間。

パッ

と、世界が入れ替わる。

それは、先ほど見た、記憶の場所だった。

ライナは、啞然とする。
ここが、先ほど見た記憶の場所だからじゃない。

「……………」

ライナが、呆然と、そして啞然として見たもの、それは、そこに、

『やあ、やっと逢えたね』

まるで、道化師の様な服を着た。

左目の下に、涙の形をした刺青が入った。

微笑ましく笑う、自分が、そこに居た。

ライナは、呆然としながらも、言う。

「誰だ、お前は、いや、お前らは……………」

ライナはそう言う。

自分の姿をした、道化師と、その後ろにいる、二つの存在に対して。

片方は、先ほどの記憶で見た。
複写眼の化物。

片方は、

「着物を着た女……………」

着物を着た、まるで、儂げな人形を想像させるような、少女が、そこに居た。

そして、三者は、皆こちらを見、道化師が、代表するように言う。

《僕は『ライナ・エリス・リード寂しがりやの悪魔の片割れ、全ての式を解くもの、とっても良いけど、そうだね、僕は、君なんだ》

「俺？」

そうライナは返すが、ライナと名乗る道化師は一度言葉を止め、

《君は知っているはずだ。記憶が戻って……ああ、なるほど、リユーラか。

すごい緻密な術式だ》

そう、ライナに後半は聞こえないように、悲しい顔をさせたくないように、小さな声でいい。

そして、ライナに、言いなおすように言う。

《そうだね、僕は、君だ。眠ってる君》

「意味が分かん……」

それを遮って、道化師は言う。

《いいんだ、今、理解しなくても。どうせ、君はいずれ知るようになる》

「そうなのか？」

《うん》

「そうか……」

そう言っつて、ライナは一度納得したそぶりをし、
そして道化師が言う。

とあるやつを指を指して、

《あれが、アルファ、出る世界が無くて、外に出られないらしい
よっ》

と言っつて、アルファに指を指す。

すると、酷く狼狽したように、アルファがビクンと、動揺する。
それを見て、目の前の、ライナそっくりの道化師は、言う。

《あれは、消してもいいけど、まだ、中には彼女がいる。

まだ消せないね。自棄を起こされて自殺されても叶わないし》

そう言っつて、道化師は肩をすくめる。

そして、道化師は、一つ、嬉しそうに笑みを深め。

《そしてあれが、『』だ。僕と似たような存在だ。

彼女も、唯一、僕の、いや、僕たちの行動が読めないらしい
中々に、僕たちに興味を示してくれてるよ》

と言っつて、道化師は、嬉しそうに、微笑む。

そして、

《君は、まだ知らなくちゃいけないことがあるだろうけど、今は
ここまで。

いずれ、分かるよ。それに君なら、自分で解き明かしちゃうじゃ
ないかな?》

そう言って、『寂^{ライナ}しがりや』は、頬^{ライナ}笑み。
景色が遠のいた。

最後に見た光景は、少女と、『寂しがりや』の、頬笑みだった。

夢現必縁 (前書き)

遅くてすまん。

仕事プラス風邪でいろいろダウンしてた。

今回も短いかな？

夢現必縁

目が、覚めた。

それは、時間にして一秒もたっていない出来事。

一秒も足っていない夢。

赤い世界の夢。

「夢……だったのか？」

それに、ライナは本当に夢か？ と思う。

夢にしては、現実味に帯びすぎていて。

夢にしては、あまりにも長すぎる一瞬。

走馬灯のようなものだとしても、あの長さとリアリティは説明できない。

だから、ライナはあれが、あの少女と、自分の姿の道化師が、現実だと、自分の中で無理やり納得させ、そして、面倒くさそうに、

そして、引きつった顔で、前を見る。

そう、そこには、

「あなたは、誰？」

そう、人形のように綺麗な顔つきで、綺麗な着物を着こなした、どこか儂さを感じさせる幼い少女が不思議そうに首をかしげてそう言った。

対してライナは、その少女を見、そして自分の服を見て。

顔を引きつらせる。

まずい、と。

そしてこう、返す。

「ええと、その、俺ってば怪しいやつじゃない、よ?」

語尾が疑問系になっている時点で怪しいことこの上なくなっているが、しかし、ライナはそう答えざる得なかった。

なぜなら、少女は着物を姿、その反面自分は陰精師の時に着ていた暗部時代の漆黒の外套を纏っている。

もう、怪しいことこの上ない。

それに、なぜこの服を着ているかといわれれば、まあ周りが森で薄暗く、もし見つかったも夜になれば闇夜に紛れて簡単に抜け出せるだろうと踏んでこの服を着ていた。

だから、ライナは自分の服が怪しいことこの上ないと知りながらも、そういう服を着てきていた。

そして、そんな格好のライナに少女は

「? そうなの?」

そういって、何か、こちらの心の中を除き見るような、そんな視線で、こちらを見てくる。

まるで完成した何かが、こちらの心の善悪を測るかのよう。

それにライナは、そんな違和感に気づきつつも、今はそんなことを気にしてられないとばかりにあせりながらも少女に言う。

「そうそう、だから、俺はここにはいなかったってことでここは一つ手を打って」

そうライナは続けようとしたところで、ドンドンと、足音が聞こえてきた。

それは、複数の足音と、複数の実力者の足運び。

それにライナは、急いで目の前の少女のいた部屋にもぐりこみ。隠れ場所を探す。

そして少女がこちらを見ていることに気づいた。
それに、ライナは冷や汗を流しながらも

「えっと、ほら、内緒にしてくれたら嬉しいかなーなんて……」

とライナが言おうとして、少女は

「……………」

一瞬沈黙し、

「いいぜ」

そう少女は男らしく笑いながら言った。

それにライナはいきなり雰囲気の変わった少女に、

「……………」

一瞬言葉を失うものの、まあいつかと

「んじゃ、お言葉に甘えて」

と、一つ笑って、部屋の中に隠れる。

隠れた場所は簡単だ。

そう天井裏だ。

むしろ簡単に隠れる場所が無かったので仕方なく天井裏に行く
しかなかったのだということは、まあ彼の運の無さだろう。

そしてライナが隠れたのとそれと同時に足音がすぐ近くまで来た。
その足音の主は、男だった。

そして、少し厳しめな声で、ゆっくりとこういった。

「御祖父様がお呼びだそうだ。座敷牢に行くぞ」

その声の主は、少女を引き連れ、すぐにその場から出て行く。足音は遠ざかっていった。

ライナは、天井裏で、音を立てないよう細心の注意を払いながら気配を殺し、微動だにしないよう勤めていた。

そして、足音が遠ざかるとともに、ライナはため息をつき、そして天井裏から降りる。

ライナは「ちよつとだけ疲れた」と、小さくつぶやき、さっきの言葉を思い出す。

「座敷牢って……やっぱあれだよな……？」

先ほどあつた爺さんを思い出す。
それは、両義家前当主。
座敷牢に閉じ込められていた爺さんだ。
それを思い出し、彼の言葉を思い出す。

『一目見ればわかる』

そういつていた。
何がわかるのかはわからなかったが。
なるほど、確かにその言葉は本当だった。

確実に彼女が、父リユーラが、先ほどの前当主が会いに行けとい
った少女だろう。

そうでなければ、あの現象も、そして彼女を一目見ただけで起こ
ったこの、両目の反応も、納得できる。

複写眼は、一瞬現れ、一瞬で消えたから見られたかどうかは知ら
ないが、しかし、まあそれは今はどうでもいい。

彼女を一目見て起きたあの現象。

彼女を一目見て聞いたあの話。

そして、

「あはは、ちょっと俺つてば、あいつのこと気になったかも」

少しの興味。

恋心とも違う。

まるで、近いものを感じる近親かん。

うちに抱えているものが似ているような気がする、と、ライナは
思う。

そして、ライナは、

「もうちょっと待って、話とか聞いて見よっかな」

そういって、周りの気配に気をつけながらも、その場にライナは寝転んだ。

そして、

「くかー……むにゃ……んあ……や、やめて……母さん……」

寝た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3496s/>

二人の伽藍 二つの魔眼

2011年8月9日15時57分発行